



Title	ことばと社会（4）（冊子）
Author(s)	
Citation	言語文化共同研究プロジェクト．2025, 2024
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/102259
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

言語文化共同研究プロジェクト2024

ことばと社会④

榎	本	剛	士
周		氷	竹
稲	葉		皐
山	口	篤	美
山	本	由	実
岸	田	月	穂

大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻

2025

言語文化共同研究プロジェクト 2024

ことばと社会④

目次

榎本剛士
「マルチモーダルな記号過程」から「行為の感じ」へ向かうための理論的覚書. 1

周氷竹
関係性の中で構築される専門性と権威性—精神障害ピアサポーターのアイデンティティ構築—.....10

稲葉阜
日本人留学経験者が感じる「制限」とその対処.....21

山口篤美
Rethinking “ELF users”: A Narrative Analysis of Inner and Outer Circle Teachers in Japan.....30

山本由実
日本の英語教育についてのインタビュー・ナラティブに見るポジショニング—
日本人大学生英語学習者 2 名の事例をもとに—.....42

岸田月穂
配信者オンラインファンコミュニティにおけるアカウント使用と規範—X 上の
投稿の談話分析を通じて—.....52

「マルチモーダルな記号過程」から「行為の感じ」へ向かうための理論的覚書¹

榎本 剛士

1. 現在地の確認

本稿は、『クロノトポス』について（榎本 2022）、『クオリア』について（榎本 2023）という形で積み重ねてきた「コミュニケーション分析に援用するための理論的基礎考察」の延長線上に位置し、記号論に基づく包括的な「コミュニケーション分析」の枠組みを構築することを最終目的に据えた、さらなる理論的覚書である。

まず、上記「積み重ね」を経た現在地を確認することから始めよう²。「クロノトポス」は、ミハイル・バフチンによる概念で、文学において芸術的に表される、時間的・空間的関係の本質的なつながりの謂である（Bakhtin 1981）。文学（小説）の形式的に構成的な（formally constitutive）カテゴリーである「クロノトポス」において、時間的・空間的標識は、一つの注意深く考え抜かれた、具体的な全体に融合し、時間は厚みと形を持つ（thicken, take on flesh）に至り、芸術的に可視化され、空間もまた、時間、プロット、歴史的な性格を帯びる（ibid.）。このような特徴を有する「クロノトポス」は、ジャンルやジャンル間の区別を定義するだけでなく、それがかなりの程度、人間（登場人物）のイメージを決定する限り、人間のイメージは本質的に「クロノトポス」的であると言える（ibid.）。

特に 2010 年代以降、「クロノトポス」概念は、社会言語学や言語人類学の分野でも援用され、異なる時間的・空間的コンテクスト化がもたらす異なるアイデンティティ・社会的関係の現れを分析する際の有効な枠組みとなっている。しかし、より重要な点は、バフチンが時間と空間の本来的なつながりを論じる時、そこには、「意識の歴史（history of consciousness）」や「精神（mind）」による経験の組織化」といった、高度に哲学的な問題があること（Clark & Holquist 1984）、そして、独自の原理から成る二つの相（「カテゴリー」と「行為」）の存在を前提としたうえで、両者の相互的な原理的独自性と相互依存・浸透との両立を梃子とし、両者を含みこんだ、より大きな統合を捉えんとする新カント主義的構図（cf. 小山 2014）があることである。

コミュニケーションを取り巻き包含する時間的・空間的コンテクストに同時に言及できる概念として、「クロノトポス」は確かに強力ではあるが、原理（哲学）的な考察不在の、分析に特化した（やや道具的な）援用は、「人間」や「世界」のあり様の根源にある、「クロノトポス」としか名付けようのない、しかし、文字通り「時空間」と安易に言った瞬間に我々の理解をすり抜けていってしまうような、（恐らくバフチンが真に問おうとした）重要な何かを後景化させるかもしれない。このことに注意をはらいながら、榎本（2022）では、「少なくとも一つの『相互行為のテキスト』³の軌跡（trajectory）が（イデオロギー的に）ビルト・インされたコミュニケーションの場」と

¹ 本稿は、科学研究費助成事業学術変革領域研究（B）「言語相互行為における身振りと言話を対象とした身体記号学」（領域代表者：坊農真弓）における「音声会話に伴う身振りを対象としたマルチモーダル記号論の構築」（22H05013、研究代表者：高梨克也）の支援を受けて行った研究の一部である。文字通りの「覚書」であり、精緻化、分析への適用については、今後の課題とする。

² 詳しくは、榎本（2022, 2023）を参照されたい。

³ 「相互行為のテキスト」とは、コミュニケーション参加者たちの間に立ち現れる、相互の（社会（集団）的）結びつきの含意や帰結に関わる構造（モデル）のことで、この再帰的（メタ語用的）モデルは、コミュニケーションの進展とともに刻一刻と変化する（Silverstein 2007）。

いう「クロノトポス」の定義を試みた。

次に取り上げたのが、近年、言語人類学において着目されている「クオリア」である。「クオリア」は、パース記号論で「第一性の事実 (facts of firstness)」として位置づけられるが (EP2: 272)、言語人類学では、「それに対して／それに関して／それを巡って人々が志向 (orient to)／コミュニケーション (interact in terms of)／グループを形成 (form groups around) するような、文化的に概念化された質感の実際の現れ (具現化)」(Harkness 2014)、「(臭さ、温かさ、硬さといった) 抽象的な質の感覚的な事例であると再帰的に理解される記号として、人間の活動において認識可能な形で具現化する指標記号」(Harkness 2015) と定義される。ここで言う「質の現れ」としての「クオリア」は、単なる「物の属性としての質」というよりも、「社会・文化的生活の事実」(Chumley & Harkness 2013) として、コミュニケーション・行為の中で、コミュニケーション・行為を通じて、再帰的に経験されるものである。「いかなるコミュニケーションも、社会・文化的にジャンル化されている」⁴という言語人類学のテーゼを受け入れるならば、「クオリア」は、そのような出来事に参加することを通じてのみ、経験可能である。換言すれば、特定のコミュニケーションにおいて、「何か」が社会・文化的に関連があるもの (コミュニケーションのコンテキスト) として指し示され、対象化されるプロセスに、コミュニケーション参加者が身を投じる (巻き込まれる) ことではじめて、「そのものの質 (感)」としてメタ語用的に経験される (アクセス可能となる) のが、「クオリア」である (Harkness 2017)。

ここからが、問題である。以下のように定義される「クロノトポス」と「クオリア」を並置させた時、何が浮かび上がってくるだろうか。

少なくとも一つの「相互行為のテキスト」の軌跡 (trajectory) が (イデオロギ的に) ビルト・インされたコミュニケーションの場

それに対して／それに関して／それを巡って人々が志向 (orient to)／コミュニケーション (interact in terms of)／グループを形成 (form groups around) するような、文化的に概念化された質感の実際の現れ (具現化)

(臭さ、温かさ、硬さといった) 抽象的な質の感覚的な事例であると再帰的に理解される記号として、人間の活動において認識可能な形で具現化する指標記号

「クオリア」は、一定の社会・文化的価値づけや評価を伴う、社会・文化的に認識可能なものの現れに付随すると考えられる (例えば、臭い服、温かいコーヒー、硬いダイヤモンド、うるさい声、など)。では、「志向／コミュニケーション／グループを形成する」の部分をどうするのか。この部分について、「クオリア」(あるいは、それに相当する何か) に関する問いを立てることはできないだろうか。このような疑問を出発点として、「クロノトポス」に結びつけながら思考を展開していくと、『相互行為のテキスト』の軌跡に巻き込まれる感じにたどり着く。つまり、『クロノトポス』についてから『クオリア』についてという道筋を経て、「コミュニケーション」(の分析) に関わる理論的考察を積み重ねていくと、それは両者の接合を誘起し、さらに、その

⁴ ここに、「クロノトポス」と「クオリア」の接合可能性 (および、その必要性) が見出される。

接合は、「コミュニケーションに参加する感じ」「行為の感じ」として経験される「全体」という形を（一つの可能性として）とるのではなからうか。

2. 言語人類学的コミュニケーション論と「マルチモーダルな記号過程」

そうであるならば、「コミュニケーションに参加する感じ」「行為の感じ」として経験される「全体」へ向かっていくための羅針盤をどうするか。ここで（も）まず、言語人類学のコミュニケーション論が大きな道標となる⁵。

Silverstein (1993) や小山 (2008) で示されている通り、言語人類学のコミュニケーション論（小山 (2008) では「出来事モデル」と呼ばれている）は、生起した出来事とコンテキストとの結びつき、および、そのような結びつきを統制する「メタ語用」的記号過程によってもたらされる、社会・文化的に認識可能な結束性（テキスト）の生成に関する一般理論である。そして、様々な記号によって指し示され（得）る「コンテキスト」は、コミュニケーションの「今・ここ」を中心として、「今・ここ」の近傍に位置する（話し手・聞き手といった）コミュニケーション参加者から、遠方に位置する宇宙観・世界観・イデオロギーに至るまで、（指標性の原理に基づく）同心円を成している、と考えられている。

このような理論化の基盤となっているのが、パース記号論である。特にパース記号論の「指標性」に着目し、語られる出来事・発話出来事との関連において文法範疇を分類したヤコブソンの枠組み (Jakobson 1957 [1971]) を社会・文化の分析に接合した Silverstein (1976) は、言語と社会・文化の実質的な接点が、「言及と述定」に特に貢献する言語の「象徴記号 (symbol)」としての次元にではなく、非言及指示的な様態で特定のコンテキスト的局面を指し示すような、あるいは、特定のコンテキスト的要素が定まらなければその言及指示対象を特定できないような（レジスター、転換子といった）「指標記号 (index)」としての次元にあることを見出した。その後、言語人類学において、この枠組みに基づく膨大な民族誌的研究が蓄積されていったことは、周知の通りである。

しかし、当然ながら、我々の社会・文化コミュニケーションは「マルチモーダル」であり、そこに関与する記号は「言語」に限定されるわけではない。マルチモーダル相互行為分析や（最近の）会話分析の研究成果を参照するまでもなく（参照すれば、より明白な通り）、我々のコミュニケーションには、目線、体の向き、頭・手・足の動き、指さしといった「身振り」も深く関わっている。日常のコミュニケーションにおいて、ある参加者の身振りが進行中のコミュニケーションに関連する何かを指し示し、他の参加者がそのような指し示し（指標）をその場で実際に読み取って、何らかの反応をしている、というコミュニケーション的状况は、全く想像に難くない。つまり、コミュニケーションにおいては、言語や身体動作を含む様々な記号の生起、そして、それらに媒介されながら関連づけられる様々なコンテキスト的要素が謂わば「渾然一体」となって、（様々な）「テキスト」（あるいは、コミュニケーションのアーキテクチャ）が生み出されていると考えられ、そのような側面を捨象したコミュニケーション分析は、分析としての全体性を獲得することはできないだろう。

確かに、言語人類学である以上、上記の理論化が、言語と社会・文化との間の実質的な接点に関わることは否定し難い。では、パース記号論に基づく言語人類学のコミュニケーション論は、

⁵ このような（理論的想像力の）拡張の受け皿になることができるところに（も）、パース記号論を基盤とした言語人類学的社会記号論の本懐がある、と筆者は考える。

言語に特化し、身体（身振り）の記号的側面を排除するような理論なのか。決して、そうではない（そうであってはならないし、そうであるはずがない）。もしそれが、社会・文化的に認識可能な結束性（テキスト）の生成に関する一般理論ならば、むしろそれは、「結束性の生成」に貢献する様々な記号の正当な取り分を認め、身体動作や、身振りの指示対象物（の配置）といった要素⁶もコミュニケーション過程の重要な一部として呼び込む（呼び込まざるを得ない）理論である（高梨・坂井田・安井・山本・榎本 2024）。そして、その「呼び込み」を体系的に許容するのをもた、理論にすでに埋め込まれているパース記号論である。

3. 記号とコンテキストの結びつきの堆積と統合

さて、コミュニケーションにおいて使用される言語、生起する身振り、両者を「記号」として同等に位置づけながら、「コミュニケーションに参加する感じ」「行為の感じ」として経験される「全体」を射程に収めることができるような枠組みは、どのような様相を呈することになるのだろうか。その全てを記述しきことは、本稿の目的（現時点での筆者の能力）を大きく超えているが、鍵となると思われる視点や概念をいくつか書き残しておきたい。

まず、「テキスト」と「コンテキスト」との間の関係を「パントマイム」に見立てて理解する Silverstein (2023) の視座である。実際のパントマイムを具体的にイメージしてみたい。パントマイムにおいて、そのパフォーマーは、見る側がマイムの「カウンターパート」として投影する（供給する）必要があるコンテキスト（マイム全体の解釈を行うための、身体の動きに対するあらゆる補完的なもの）、および、そのようなコンテキストが厚みを増していくプロセスに浸ることになる。つまり、身体の動きが、認識可能な形で、徐々に結束性を獲得していくプロセスは、そのような結束性を担保する枠組み（コンテキスト）が徐々に定まっていく「もう片方の効果」（counterpart effect）と表裏一体である。そして、そのようなコンテキストは、パフォーマーと観衆の両者を同じ（解釈上の）社会空間に存在する者として枠づけるとともに、こうして（成功裏に）進行していくマイムは、心情・感情を表現する（あるいは、見る側に特定の心情・感情を植え付ける）ことさえ、できる（ibid.）。

このような基本的な視点を踏まえたいうで導入したいのが、グッドウィンによる「文脈的統合態」（Goodwin 2018）、および、モンダダによる「マルチモーダル・ゲシュタルト」（Mondada 2016）という概念である。「文脈的統合態（contextual configuration）」とは、コミュニケーション参加者が行為を構築する際に明確に注意を向けている、言語表現の構造、プロソディ、目に見える身体の動きといった、特定のモダリティにおいて組織化される特定の記号（作用の）形式（specific forms of semiosis）の組み合わせが「セット」になったものである（Goodwin 2018）。また、「マルチモーダル・ゲシュタルト（multimodal Gestalts）」は、（テーブルに被さるような体の傾き、伸ばされた腕・手・指、モノの操作といった）関連する詳細な動作のパターンと、特定の相互行為的連鎖の環境における特定の言語表現と身体の姿勢とが相俟って構成するもので、言及指示のみならず、ターン・連鎖・共同で行われる行為の組織化、および、そこでの社会的関係の（言語のみならず、身体によっても媒介される）マルチモーダルな交渉のあり様に関与する（Mondada 2016）。

ここで、「文脈的統合態」「マルチモーダル・ゲシュタルト」は、上述のパントマイムで言うと

⁶ これらの要素は、1960年代の中頃に旗揚げされた「コミュニケーションの民族誌」においてすでに、十分、認識されている（Hymes 1972）。

ころの「身体の動き」の側における「統合」「ゲシュタルト」に主に焦点を当てた概念であることに留意することが有益、かつ重要である。様々なモダリティにおいて具現化する記号の形式は、それぞれ単独にではなく、コミュニケーションの進展に絶妙に同期した「統合態」「ゲシュタルト」として経験される、とする視座は、コミュニケーションの動的な「全体」を射程に収めるうえで不可欠であると思われる。では、これら「統合態」「ゲシュタルト」の「カウンターパート」、すなわち、「もう片方の効果」（上記参照）として、何を措定すればよいのか。ここで、（マルチモーダル相互行為分析や会話分析で言われるところの「行為」や「アクティビティ」も含むことができる概念として）「ダイナミック・フィギュレーション」（Silverstein 2023）を援用することができるだろう。

「ダイナミック・フィギュレーション」は、「儀礼」の根幹を成す記号作用であり、(a) 時間・空間的、社会的コンテキストにおいて、（言語を含む）儀礼的行為を通じて蓄積されるテキスト化された形式と、(b) 社会空間 (the social universe) に関する信念の構造・体系との間の一致・対応関係をコミュニケーションの中で生み出す⁷ (ibid.)。このプロセスは、特に言語を含む複数の記号的なチャンネルを横断する形で、時間・空間における動きを実現 (enact) しながら、コミュニケーション参加者を特定のルールに基づいて、特定の（社会的）役割を担うように動員する (ibid.)。そして、その結果として、コミュニケーションの中で、コミュニケーションを通じて、コミュニケーションそれ自体が、社会空間 (the social universe) に関する信念の構造・体系によって、当該の儀礼がこの世界にもたらすものとされている変容の「ダイアグラム（指標的類像）」となり、そのような変容を記号論的に描き出す、つまり、「今・ここ」に顕現させるのである (ibid.)。

4. 何が「行為の背中」を押すのか

ここまで、生起する記号の形式に関わる「統合態」「ゲシュタルト」を措定し、そのような「統合態」「ゲシュタルト」の「カウンターパート」、および、両者の相互嵌入プロセスを射程に収める概念として、「ダイナミック・フィギュレーション」を導入した。

前節ではかなり抽象的な記述を行ったが、実際の事例に照らし合わせながら考えてみよう。以下は、日本科学未来館（東京都江東区）において収録された科学コミュニケーター（SC）と来館者の日本語会話に ELAN によるアノテーションが（部分的に）付されたマルチモーダルコーパス「未来館 SC コーパス」からのデータである。この場面では、SC（各画像左端）が来館者に対し「宇宙を調べる方法」を説明している。方法が「大きく分けて三つ」あることに言及し、「理論（計算）」に続く二つ目の方法について「コンピューターを使ってシミュレーションするの」と言い終えたところで（画像 1）、SC は、一歩下がる、特定の方向に顔を向ける、特定の方向を指さす、特定の方向に踏み出す、といった身振りを伴いながら「もう一個、使ってるのが、ああいう」と続ける（画像 2）。この間、二人の来館者は、SC が志向する方向と同様の方向に顔や体を向ける形で反応し、「ああいう」という言葉を聞いたところでゆっくりと歩き出（す一歩目を踏み出）している。そして、「ああいう」の後、「望遠鏡」という言葉を受けて、来館者の（ゆっくりとした）歩みはよりリズムカルになり、全員が歩調を合わせて歩いていく（画像 3）。

⁷ より簡潔に示せば、(a) が (b) の「具体的な現れ」として自らを呈示するような記号過程、と言えるだろう。



画像 1



画像 2



画像 3

時間にして約 5 秒の出来事⁸だが、ここにおいて、「文脈的統合態」「マルチモーダル・ゲシュタルト」「ダイナミック・フィギュレーション」の具体例を見出すことができるように思われる。まず、「もう一個、使ってるのが、ああいう」という SC の発話と、それに伴う、一歩下がる、特定の方向に顔を向ける、特定の方向を指さす、特定の方向に踏み出す、といった SC の身振りは、それぞれが単独に、互いに切り離されて無関係に存在しているのではなく、相互に結束した「統合態」「ゲシュタルト」を形成していると考えられる。ここで重要なことは、これらの記号（作用の）形式が「統合態」「ゲシュタルト」を形成していく過程と同時進行で、それらが指標的に指し示す対象もまた、無矛盾的に堆積している点である。具体的には、「一歩下がる」が指標する「空間」「（開けた）視界」、「顔の向き」や「指さし」が指標する特定の「方向」、それらと同じ方向への「踏み出し」が指標する「動き（モメンタム）」が、形式の「統合態」「ゲシュタルト」のカウンターパートとなる、対象の「統合態」「ゲシュタルト」を形成する時、それは、特定の空間を通り、特定の方向へ向かう「動きの表象」を形成する。

ここで、「ああいう」という遠称の指示詞（ダイクシス、転換子）を通じて、向こうの方にある何か⁹が「コミュニケーションの今・ここ」に結びつけられた時、二人の来館者の足が動き出す。「ああいう」を通じて、上記の「動きの表象」の具体的な基点と終点が決まったことにより、「足の動き出し」を引き起こすに十分なコンテキストが定まり、実際の「足の動き出し」は、その指標的類像である、と理解することができる。さらに、目的地として措定された「モノ」が「望遠鏡」（三つ目の方法）であることが開陳されると、SC と来館者は、それに向かって歩調を合わせて歩いていくが、この時点での「歩調を合わせた歩み」と、直前の「足の動き出し」は、質的に大きく異なる。

徐々に形成されてきた形式の「統合態」「ゲシュタルト」と、そのカウンターパートとなる「動きの表象」は、「ああいう」という指標的言語範疇の生起を通じてコミュニケーションの「今・ここ」に投錨され、そのような投錨が、「足の動き出し」を結果（効果）として生み出した。そして、「望遠鏡」という「宇宙を調べる方法」が関連づけられることで、その動きは一気に社会・文化的性格をまとい、「次の展示」に向けた「移動」となる。つまり、コミュニケーションの中で徐々に形成されてきた「統合態」「ゲシュタルト」が、『〇〇館』で専門的な知識を持つスタッフの説明を聞きながら展示を見て回る」という「社会空間 (the social universe) に関する信念の構造・体

⁸ この場面に関する「相互行為のマルチモーダル分析」については、坂井田・坊農・牧野（2020）を参照。本稿で提示した枠組みに基づく詳細な分析（記号論的なアノテーション）は、稿を改めて取り組むこととする。なお、本稿が目指している記号論的な分析は、マルチモーダル分析を排除するものではなく、ところどころで重なる（しかし、「カウンターパート」を措定し、「ダイナミック・フィギュレーション」にまで踏み込む点において大きく異なる）ものである。

⁹ 二人の来館者が立っている地点から SC が指さす方向を見た時、明らかに際立つモノが現に空間的に存在しており、それがまさに、「望遠鏡の模型」である。

系」と一致し、前者が後者の「ダイアグラム」（具体的な現れ）として自らを呈示することで、「身体」「言語」を巻き込んだ指標的記号過程が（より強固な）メタ語用的統制を被り、「次の展示物への移動」という（ジャンル化された）行為への「一押し」を媒介する、という記号論のプロセスを措定できるのではないか。

さらに、ここから踏み込むべき問題として、「行為の感じ」が残っている。上記のプロセスにおいては、社会的行為の表象としての「行為の図像」とでも呼べるものが関与しているが、パースによれば、「概念は、ダイアグラム、あるいは、アイコンの、我々に対する生きた影響であり、そのいくつかの部分が、思考において同じ数の感情 (feelings) や観念 (ideas) に結びついている」という (CP: 7.467)。さらにバフチンは、実際に生み出される発話には、「意味と評価を生み出す感じ (feeling)、すなわち、一人の人間の全体として、動き、位置を取る感じ」が伴うことを指摘している (Bakhtin 1990)。

このような、パースとバフチンによる視座と、本稿で論じてきた「文脈的統合態」「マルチモーダル・ゲシュタルト」「ダイナミック・フィギュレーション」を掛け合わせると、次のようになる。コミュニケーションにおいて、特定のモダリティにおいて組織化される特定の記号（作用の）形式は「統合態」「ゲシュタルト」を成し、そのカウンターパートとして、それらの形式が指し示す対象の「統合態」「ゲシュタルト」が同時に生成される。そして、それが、社会空間 (the social universe) に関する信念の構造・体系に属する「行為のモデル」との一致・対応関係を持つに至る時、それは、モデルの「ダイアグラム」（具体的な現れ）として、自らを呈示するのみならず、その生きた影響として、「意味と評価を生み出す感じ (feeling)、すなわち、一人の人間の全体として動き、位置を取る感じ」を喚起し、そのような「全体」は、行為（の決断）に結びついた「動機的」なレリヴァンス（シュッツ & ルックマン 2015）となる。

5. 方位の確認：社会指標的コミュニケーション論、ハビトゥス、記号論的現象学

社会言語学や言語人類学においてバフチン由来の概念が援用される際、その焦点は、言語の社会的側面、イデオロギー的負荷（を基盤とする対話性）、階層性、多声性に当てられがちである。しかし、バフチンの著作を読むと、随所に「全体 (“whole(ness)”)」という言葉が出てくことに気づく (Bakhtin 1986)。「クロノトpos」から出発し、「クオリア」を経由した「理論的基礎考察」は、本稿において「文脈的統合態」「マルチモーダル・ゲシュタルト」「ダイナミック・フィギュレーション」へ寄港し、「行為の感じ」「行為の生成過程」を包含する「全体」を遥か遠くに臨みながら、再出発したところである。

最後に、重要な方位をいくつか確認しておこう。まず、パース記号論を基盤とした言語人類学の社会記号論（社会指標的コミュニケーション論）は、基本的な視座として保持することが有効である。言語と社会・文化の実質的な接点への記号論的なまなざしはそのまま、言語以外のモダリティにも拡張可能である。さらに、そのような接点を「コミュニケーション」を基点として理論化する枠組みである限り、言語人類学の社会記号論は、コミュニケーションに関与する様々な記号（過程）を包含するための理論的拡張力を、パース記号論を通じて獲得し続けることができる。

そして、「文脈的統合態」「マルチモーダル・ゲシュタルト」「ダイナミック・フィギュレーション」を「身体」や「感じ」に結びつける際に見落としてはならない視座を提供してくれるのが、ブルデューの「ハビトゥス」である。ハビトゥスは、「知覚・評価・行動図式のシステムが実践的認識行為—それら行為が反応すべき、条件付きで慣習的な刺激を見分け認知することの上に成り

立つ実践的認識行為—を遂行することを可能ならしめる」、また、「状況を、意味を付与された全体として構築することを可能ならしめる」、「歴史の産物」、「世界の諸構造と諸傾向の身体化の所産」である（ブルデュー 2009）。本稿が目指す「全体」は、コミュニケーションの社会・文化・歴史のプロセスから切り離されたいかなるものにも還元されてはならず、あくまでコンテクスト化された行為をめぐる記号過程として探究され（続け）なければならない。

加えて、より正面から身体に記号論的（哲学的）に迫るために、「記号論的現象学 (the semiotic phenomenology of communication)」(Catt 2017) の観点を積極的に取り入れることも、考慮に値するだろう。Catt (2017) は、「記号としての身体 (body as sign)」という視座を明示的に打ち出しており、そこで言及される、パース、ベイトソン、メルロ＝ポンティ、ヤコブソン、サピア、ブルデューといった知的資源は、本稿が拠って立つところでもある。コミュニケーション理論として、言語人類学の社会記号論と突き合わせた時、共約可能性・不可能性の両面が浮かび上がってくることが予期されるが、本稿に認めた理論的考察を進めていくうえで、「記号論」と「現象学」という二本の補助線を常に意識化できることは極めて建設的であろう。

以上、未だ粗いものではあるが、「マルチモーダルな記号過程」から「行為の感じ」へ向かうための理論的覚書として、繰り返し立ち返りながら精緻化・更新していく「原案」のようなものは生み出せたと思う。もちろん、俎上に載せたい名前、概念は尽きないが、「コミュニケーション」の全体、より正確には、「コミュニケーションの経験」の全体に向けた、小さな一歩となっていることを願い、信じつつ、本稿を閉じる。

参考文献

- Bakhtin, Mikhail M. (1981) “Forms of time and of the chronotope in the novel: Notes toward a historical poetics,” *The Dialogic Imagination*, ed. by Michael Holquist, 84-258, University of Texas Press, Austin, TX.
- Bakhtin, Mikhail M. (1986) *Speech Genres and Other Late Essays*, ed. by Carl Emerson and Michael Holquist, University of Texas Press, Austin, TX.
- Bakhtin, Mikhail M. (1990) *Art and Answerability: Early Philosophical Essays* by M. M. Bakhtin, ed. by Michael Holquist and Vadim Liapunov, University of Texas Press, Austin, TX.
- ブルデュー, ピエール (2009) 『パスカルの省察』 加藤晴久 (訳) 藤原書店. [Bourdieu, Pierre (1997) *Méditations Pascaliennes*, Éditions du Seuil, Paris].
- Catt, Isaac E. (2017) *Embodiment in the Semiotic Matrix: Communicology in Peirce, Dewey, Bateson, and Bourdieu*, Fairleigh Dickinson University Press, Madison, NJ.
- Chumley, Lily H. and Harkness, Nicholas (2013) “Introduction: Qualia,” *Anthropological Theory* 13(1/2), 3-11.
- Clark, Katerina and Holquist, Michael (1984) *Mikhail Bakhtin*, The Belknap Press of Harvard University Press, Cambridge.
- 榎本剛士 (2022) 「『クロノトpos』について：コミュニケーション分析に援用するための理論的基礎考察」『言語文化共同研究プロジェクト ことばと社会 (1)』, 21-30 頁.
- 榎本剛士 (2023) 「『クオリア』について：コミュニケーション分析に援用するための理論的基礎考察 II」『言語文化共同研究プロジェクト ことばと社会 (2)』, 1-10 頁.

- Goodwin, Charles (2018) *Co-Operative Action*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Harkness, Nicholas (2014) *Songs of Seoul: An Ethnography of Voice and Voicing in Christian South Korea*, University of California Press, Berkeley and Los Angeles.
- Harkness, Nicholas (2015) “The pragmatics of qualia in practice,” *Annual Review of Anthropology* 44, 573-589.
- Harkness, Nicholas (2017) “The open throat: Deceptive sounds, facts of firstness, and the interactional emergence of voice,” *Signs and Society* 5(S1), S21-S52.
- Hymes, Dell (1972) “Models of the interaction of language and social life,” *Directions in Sociolinguistics: The Ethnography of Communication*, ed. by John J. Gumperz and Dell Hymes, 35-71, Basil Blackwell, Oxford.
- Jakobson, Roman (1971 [1957]) “Shifters, verbal categories, and the Russian verb,” *Selected Writings II*, 130-147, Mouton, The Hague.
- 小山亘 (2008) 『記号の系譜：社会記号論系言語人類学の射程』 三元社.
- 小山亘 (2014) 「記号／運動—文字、肖像、増殖、文化、その断片 消えてしまった新しい人へ」『異文化コミュニケーション論集』第12号, 45-64頁.
- Mondada, Lorenza (2016) “Challenges of multimodality: Language and the body in social interaction,” *Journal of Sociolinguistics* 20(3), 336-366.
- Peirce, Charles S. (1931-1958) *The Collected Papers of Charles S. Peirce*, 8 Volumes, ed. by Charles Hartshorne, Paul Weiss and Arthur W. Burks, The Belknap Press of Harvard University Press, Cambridge, MA [cited as CP].
- Peirce, Charles S. (1998) *Essential Peirce: Selected Philosophical Writings, Volume 2 (1893-1913)*, ed. by The Peirce Edition Project, Indiana University Press, Bloomington [cited as EP 2].
- 坂井田瑠衣・坊農真弓・牧野遼作 (2020) 「『次の場所まで歩く』ことの相互行為的組織化：科学コミュニケーションによる来館者誘導の身体的プラクティス」『質的心理学研究』第19号, 7-25.
- シュッツ, アルフレッド, ルックマン, トーマス (2015) 『生活世界の構造』那須壽（監訳）筑摩書房. [Schütz, Alfred and Luckmann, Thomas (2003) *Strukturen der Lebenswelt*, UVK Verlagsgesellschaft mbH, Konstanz].
- Silverstein, Michael (1976) “Shifters, linguistic categories, and cultural description,” *Meaning in Anthropology*, ed. by Keith H. Basso and Henry A. Selby, 11-55, University of New Mexico Press, Albuquerque, NM.
- Silverstein, Michael (1993) “Metapragmatic discourse and metapragmatic function,” *Reflexive Language: Reported Speech and Metapragmatics*, ed. by John A. Lucy, 33-58, Cambridge University Press, Cambridge.
- Silverstein, Michael (2007) “How knowledge begets communication begets knowledge: Textuality and contextuality in knowing and learning,”『異文化コミュニケーション論集』第5号, 31-60頁.
- Silverstein, Michael (2023) *Language in Culture: Lectures on the Social Semiotics of Language*, Cambridge University Press, Cambridge.
- 高梨克也・坂井田瑠衣・安井永子・山本敦・榎本剛士 (2024) 「相互行為中の身体動作を対象としたマルチモーダル連鎖分析から身体記号学へ」『社会言語科学会第48回大会発表論文集』, 391-400頁.

関係性の中で構築される専門性と権威性 ー精神障害ピアサポーターのアイデンティティ構築¹ー

周 氷竹

1. はじめに

本稿は、周（2024）における精神障害ピアサポーターのアイデンティティ構築に関する考察を継承し、それをさらに発展させることを目的とするものである。本稿および前稿はいずれも、共通する制度的背景および学術的文脈を共有している。すなわち、制度的にはピアサポートの導入が推進される中で、精神障害の当事者が「支援者」として支援現場に関与する機会が増加している点が挙げられる（相川 2013；厚生労働省 2021）。

しかし、当事者でありながら支援者でもあるピアサポーターの複雑な立場性は、制度的議論のみでは捉えきれず、個別の実践を通じた実証的な検討が求められる状況にある。そうした問題意識のもと、前稿（周 2024）では、2名のピアサポーター（IM および KE）を対象としたインタビュー・ナラティブの分析を通じて、語り手の位置づけを示す「ポジショニング」および「声（モノログ／ダイアログ）」という概念を用い、語りにおけるアイデンティティ構築のプロセスと、そこに映し出される社会的規範を明らかにした。その結果、IM と KE はいずれも当事者と行政、当事者と非当事者のあいだを媒介する「仲介者」としての立場を、語りの中で構築していることが示された。

本稿ではこの知見を踏まえつつ、新たに SY というピアサポーターの語りに焦点を当てる。SY もまた、IM や KE と同様に地域で活動するピアサポーターであり、社会人入試を経て通信制大学の福祉学科に在籍しながら、複数の当事者団体に関与し、加えて障害者グループホームでスタッフとして勤務している。SY は、研究者、医療専門職、病院スタッフ、グループホームの管理者・利用者など、多様な他者と交差する立場にあり、その語りには複数の関係性の中で形成されるアイデンティティの動態が映し出されていると考えられる。本稿の目的は、SY の語りを通して、彼女が多様な他者との関係性においていかに自己を位置づけ、特に専門性や権威性をどのように構築しているかを明らかにすることにある。そのために、以下の2つのリサーチ・クエスション（RQ）を設定する。

RQ（1）SY はいかにして語りの中で自己を位置づけているのか。

RQ（2）SY はいかなる語りによって専門性や権威性を構築しているのか。

これらの問いに対する分析を通じて、制度上の「支援者」という役割と、実際の支援現場での語りにおけるアイデンティティ構築との間に存在する緊張関係を明らかにすることが、

本稿の最終的な目標である。

2. 先行研究の概観:ピアサポーターの立場性に関する研究

精神障害をもつ当事者が「支援者」として支援現場に関与するピアサポートの制度的導入は、2010年代以降、政策的にも積極的に推進されてきた。相川（2013）は、精神障害者の地域移行をめぐる文脈において、ピアサポートが制度的に位置づけられるに至った過程を示しつつ、ピアサポーターによる「経験知」に基づいた支援の有効性が強調されていることを指摘している。

一方で、ピアサポーターの立場性、特に専門職との関係性における位置づけについては、依然として多くの課題が残されている。Vandewalle et al.（2016）は欧米の調査において、専門職の側にピアサポーターへの否定的な態度が根強く存在し、それがピアサポーターの役割遂行における障壁となっていることを明らかにした。日本においても、山川・船越（2020）は、専門職によるピアサポーターへの理解不足が、ピアサポーターにとっての困難の一因であることを示している。さらに竹内ら（2024）の調査では、ピアサポーターが感じる困難の一つとして、「自身の立ち位置が明確に定まらないこと」が挙げられており、インタビューの中では、「専門職と対等な仲間として扱われていないと感じる」「利用者や専門職との適切な距離感がつかめない」「専門職と比較して劣等感を抱く」といった声が聞かれた。こうした環境のもとで、ピアサポーターは「専門職と対等ではない自己」や「受動的な立場にある自己」といったアイデンティティを形成し、しばしば従属的な役割を受け入れざるを得ない状況に置かれていると考えられる。

3. 方法論

3.1 談話分析

談話（discourse）は、一般的には1つの発話や1つの文以上の「話し言葉もしくは書き言葉のまとまり（stretches of spoken or written language）」（Holmes&Wilson 岩田訳 2022:153）と理解されている。

談話分析は人がどのような言語を使って、どのような目的を達成するかを分析する方法である。談話分析の根底にある問いとして挙げられるのは、「言語がどのように使用されるのかに際し、どのような社会的要因、構造、規範が役割を果たしているのか、またその関係性はどのように作られたのか」、「使用される言語が、使用者の、他の参加者の、そして社会の成員たちの社会的アイデンティティにどのように関わっているのか」などである（Wardhaugh&Fuller 岩田訳 2022:155）。

社会言語学のアプローチは「社会と言語の結びつきをより微視的に見ていくことで、「社会」を捨象した言語理論のたんなる批判にとどまらない「方法」を手に入れるものである（嶋田・三上 2022:16-17）。

本稿では、当事者らの流動的なアイデンティティを捉えることが一つの狙いとなっている。いくつかのアイデンティティが交渉する様子を細密に描くには、言語的な特徴まで細かく分析する談話分析というアプローチが有効であると考えられる。

3.2 アイデンティティ(identity)とポジショニング(Positioning)

アイデンティティ(identity)という、人に関わる要素と言語のインターフェイスの考察は、言語と社会の直接的な結びつきを明るみに出すことができる（嶋田・三上 2022）。そのため、アイデンティティとナラティブが密接に関連していることは、談話分析に関する研究の前提となっているようである（Zimmerman（1998）、Georgakopoulou（2006）、De Fina and Georgakopoulou（2012）などを参照）。Georgakopoulou（2006）はZimmerman（1998）ⁱⁱのアイデンティティに対する捉え方を基に、「大きな」アイデンティティ（相互行為の場を超え、外因的で「持ち運び可能な」(transportable) アイデンティティ）と、相互行為上の役割といった「小さな」アイデンティティ（語られる特定の場に固有の、内発的なアイデンティティ）にアイデンティティを分けている。さらに「大きな」アイデンティティを明らかにするためには、語りに内在された「小さな」アイデンティティを分析することが最善の方策であると論じている。本研究でも、語りにおける「小さな」アイデンティティ（位置づけ）を分析することで、より大きなアイデンティティの考察につなげることができるものと想定する。

ポジショニング(Positioning)は、アイデンティティと同様に社会的構築主義の立場に立つ概念であり、人々の語りの中で自己がどのように位置づけられるかを捉えるものである。ポジショニングは談話の流れの中で動的に形成されるものであり、アイデンティティとは固定された属性ではなく、多様な語りの実践を通じて構成され、文脈ごとに再構築されるものと捉えられている（Davies and Harré 1990）。このように、ポジショニングは、他者との関係性と状況に応じた語りの中で常に変化し続ける、可変的かつ関係的な存在である。

4. データについての説明

本研究で用いるデータは 2022 年 5 月に行われた 1 時間 41 分のインタビューの断片である。筆者は当事者団体 Y に依頼文を送り、団体のメンバーに回覧してもらい、協力が得られたメンバー SY に対して、インタビューを行った。インタビュアー（筆者、ZB）とインタビューー（SY）の基礎情報は以下の表 1 の通りである。

表 1 インタビュー参加者の基礎情報

協力者	世代	職業	性別	エスニシティ	精神障害
ZB（筆者、 インタビュアー）	20 代	大学院生	女性	中国	非当事者
SY （インタビュイ ー）	40 代	ピアサポーター、 福祉専攻の大学生、 自助グループ K の代表	女性	日本	双極性障害の当事者

できる限り自然な談話データを収集するため、半構造化インタビューを行った。インタビューにおいて、インタビュアーは予め用意した質問（ピアサポーターに関する経験、当事者団体での活動など）を適宜投げかけ、インタビュイーに語ってもらった。

また、倫理的な配慮を行った上で、調査に協力してもらうことについてインタビュイーの同意を得た。同時に、その調査の内容が精神障害に関するライフ・ストーリーについて聴きたい旨を明記したインフォームド・コンセントをとった。

5. データ分析

例 1 と例 2 は、インタビュー録音の 19:01～21:09 にかけて連続して語られた内容である。例 1 と例 2 では、地域活動支援センターの管理者、病院のスタッフ、グループホームの社長といった異なる立場の人物が登場し、各人物との間で展開されるスモール・ストーリーが描かれている。これらのスモール・ストーリーを通して、SY が自己のアイデンティティをどのように構築し、各人物との関係性をどのように形成したかが明らかになる。例 1 と例 2 は、SY の個別の経験を通じて、支援現場における関係性の多層性と、当事者を取り巻く群像を浮かび上がらせるものである。

例 1 <ピアは健常者に使われるんですよ>

1. SY: え:とね 地域活動支援センターっていうところの管理[者ですね
2. ZB: [あ: なるほど
3. SY: そこの そこの管理者がピアのグループとか 仕切 [ってるから
4. ZB: [あ::
5. その管理者は 当事者ですか
6. SY: 違います 違います
7. ZB: なるほど (..) なるほど 勉強に h なりました [た@@@
8. SY: [@@@@
9. ほとんど専門職ですよ 健常者ですよ
10. 健常者に
11. ZB: はい
12. SY: ピアが使われてるんですよ
13. ずっとそういうのが続いてるから 歴史的にもずっとそうなんですよ

14. ピアは健常者に 結構使われるんですよ
15. ZB: はい
16. SY: 地域移行って言って 病棟訪問とかも私してたんですけど その時でも
17. あの病院のスタッフとかに
18. 閉鎖病棟とか鍵開けてもらわないと[ダメじゃないですか
19. ZB: [はい
20. SY: 鍵開けてもらうのでも
21. ちょっと待ってて あんたら来たら忙しくなるわとか h[言われたり hh@@
22. ZB: [ん
23. SY: ほんまに対等に見てもらえへんっていうか そんなとことかもあるし
24. ちょっとつらい思いますよ@@@ いやもう

例1の1-15行、16-24行には、地域活動支援センターの管理者と病院のスタッフに関するスモール・ストーリーが挿入されている。これらについて順に分析する。

まず、3行目では、SYが地域活動支援センターの管理者について「ピアサポーターのグループを支配している」と述べている。SYの言語使用に注目すると、「仕切る」(3)という権威的な表現を用いることで、管理者の権力の強さを表している。さらに、ZBが管理者が障害当事者であるかどうかを確認すると、SYは「違います違います」(6)と繰り返し否定し、9行目で管理者が「専門職」(9)であり「健常者」(9)であると答えている。10-12行目で、SYはピアサポーターが健常者に「使われ」と述べて、しかもその状態が過去から現在まで続いていると指摘している。「使われる」という動詞を通じて、SYはピアサポーターが受動的かつ物扱いされている存在であることを強調している。また、9行目ではSYが「専門職」と「健常者」をほぼ同義的に用いている点も注目に値する。以上を踏まえると、SYはこの語りを通じて「ピアサポーター・障害者」対「専門職・健常者」という対立的な構図を構築し、受動的な立場にある障害者としてのピアサポーターと、主導権を握る健常者としての専門職という関係性を明確にしている。

次に、16-24行では、SYが過去にピアサポーターとして閉鎖病棟を訪問したエピソードを語っている。その際、病棟のスタッフに閉鎖病棟の鍵を開けてもらう必要があったが、SYはスタッフの「ちょっと待ってて あんたら来たら忙しくなるわ」(21)という言葉を用い、歓迎されていない雰囲気を感じたことを語っている。「あんたら」という表現にも注目すべきで、これはSY個人ではなく、ピアサポーターというグループ全体を指していると考えられる。つまり、個人としてのSYではなく、ピアサポーターという集団そのものが好まれていないことが示されている。このスタッフの言葉から、SYは病院スタッフがピアサポーターに対して嫌悪感を抱いているという普遍的な態度を読み取っている。また、23行目でSYはピアサポーターと病院スタッフとの間に明確な権力差が存在し、対等な関係にはないこ

とを強調している。ここで、ピアサポーターが「嫌われ者」で部外者（outsider）としての立場に置かれていることが浮かび上がる。

例 1 の語り続く例 2 では、グループホームの管理者に関するスモール・ストーリーが展開される。

例 2 <立場が一緒やとか 同じ病気持ってるとか 絶対言うな>

25. ZB: SY さんはなんか 同時に当事者で そして
26. グループホームで社員として働いてますね なんていうか
27. ちょっと一種のちょっと健常者の立場にな な [なっていますね
28. SY: [ん:: なってますね
29. ん だから なんか あの
30. グループホームにいる利用者さんに対して
31. 私は自分らが一緒やでっていうことを言いたいんだけど
32. それは絶対言わないでって言われて
33. ZB: ん
34. SY: あの立場が一緒やとか 同じ病気持ってるとか 絶対言うなって[言われてて
35. ZB: [誰 誰が
36. SY: 管理者に しゃ 社長に言 hh われて グループホームの社長に言われてて
37. そうになったら もう言うこと聞いてくれなくなるよって言われて
38. ZB: なるほど
39. SY: なめられるって言って
40. ZB: なるほど

語りの冒頭で、SY は自身が現在グループホームの社員として障害当事者にサービスを提供していることを ZB に説明している。ZB が SY の立場が「健常者の立場」(27) に切り替わるのかを確認すると、SY は「ん:: なってますね ん」(28) と答え、グループホームの社員としての活動においてある程度健常者の立場に立つことを認めている。さらに、SY はグループホームの利用者を「利用者さん」(29) と呼ぶことで「サービス提供者」としての自己を前面に出しつつ、「自分らが一緒やで」(30) と述べて当事者性に基づく共感の土台を築きたい意図を示唆している。しかし、グループホームの管理者である社長からは「立場が一緒や」(33)、「同じ病気持ってる」(33) といった発言を禁じられている。その理由として、管理者は「そうになったら もう言うこと聞いてくれなくなる」(36) と述べ、SY が障害を開示すると権力差が失われ、相手から「なめられ」(38) 見下されることになると考えている。この管理者の考え方から、SY に障害者であることを隠し、「健常者」として振る舞うことが求められていることがわかる。ここで、SY は障害者であることを隠しつつ、健常者として振る舞う自己を構築している。

例 1 と例 2 の分析をまとめると、SY は、受動的な立場にある障害者としてのピアサポー

ターである自己、「嫌われ者」で部外者としてのピアサポーターである自己、障害者であることを隠して「健常者」として振る舞う社員である自己といったアイデンティティを構築している。

インタビューが進行するにつれ、インタビュアーである研究者と、インタビュイーである研究協力者という立場が明確化され、それぞれの立場に応じた相互行為が展開されていく。例3は、そうしたやり取りの一場面（録音の 57:29-59:01）であり、SY がインタビュアーの ZB を前に、自身が抱く「研究者」という存在に対するイメージや見解を述べる語りである。

例3「(先生たちは) なるほど っていう」

1. ZB : SY さん SY さん はやっぱり なんか 他の院生さん あるいは
2. 先生たちはそんなに健常者目線が () と思いますか
3. SY : 研究者の人って
4. ZB : はい
5. SY : なんか なんだろう 空気になりたがるというか
6. どっち(.) どっちでもないよ [ていう
7. ZB : [あ : :なるほど
8. SY : うちの味方でもないし どっち[でもない
9. ZB : [なぜそう思われますか けん 研究者たち
10. SY : なんかね あの: ん::: 話してると
11. ZB : ん
12. SY : すごく ん よく聞いてくれはるん
13. ZB : んん
14. SY : でもそれは違うよと思っても絶対言わへんし
15. ZB : ん
16. SY : それはそうだね ともあんまり h 言わないし
17. ZB : あ::
18. SY : どっちかといえは ん ん ん んって=
19. ZB : =お::
20. SY : よく聞いてくれはる
21. ZB : なる[ほど そういうことか
22. SY : [なるほどね↑っていう
23. ZB : 私もさっきなるほどって言って
24. SY : 何も知らない状態で聞いてくれるから 一番助かるんです@@
25. 偏見とかないから
26. ZB: え↑ そう そういうのがいいと思います?
27. SY : 知ったかぶりで ちょっと知ってるからって言って
28. そうだよな そうだよなっていう人と やっぱり 比べると
29. ZB : んん
30. SY : 知らないふりしてくれる方が話しやすいっていうか
31. ZB : なるほど
32. SY : 知ってても言わないっていうか
33. この人は違うんだろかなと思っけて聞いてくれるから それがすごくありがたい

例3の語りに入る前に、SYは例2が示したように、職場であるグループホームの上司が健常者目線を持っていることに不満を漏らした。ZBはこの話の流れを受け、大学の他の学生やSYにインタビューした研究者や教員にも同様の健常者目線iiiを感じるかどうか尋ねた。この質問を受けて、「なんか なんだろう」(5)と応じたように、SYは自身が考える研究者像を具体的に説明するため適切な語彙を探している。その後、彼女は「空気になりたがる」(5)という表現を用いて描写し、さらに「どっち(.) どっちでもないよ」(6)と補足説明を加えた。「空気になる」とは、「空気のような存在、つまりいてもいなくても気にならないようになる、存在を意識しないようになる」と言う意味である。ここでは、SYは「空気になりたがる」(5)と言った途端、誤用に気づき、そのすぐ後で自ら修復を行い、「中立的な立場」であるという、本来自分が言いたかったことを説明していると考えられる。ここで特に注目すべきは「どっち」(6)という表現の使用である。「どっち」について、1つの興味深い点が浮かび上がる。「どっち」は通常、二者択一の状況で用いられる。この表現は、ここで、2つの異なる立場や視点の間での中立性や曖昧さを示唆しており、SYの認識における研究者の立ち位置を表現している。8行目において、SYは「うちの味方でもない」と述べている。すなわち、研究者である人は必ずしも障害者と同じ側に立つわけではないことを示唆している。また、SYはここで明確に述べていないものの、「どっちでもない」(6)が示したように、研究者がいわゆる健常者集団にも属しないとSYが考えていることが明らかに読み取れる。

7行目で、ZBは「あ::なるほど」という表現を用いて、驚きを伴う新たな気づきを得た様子を表している。この反応が示したように、SYの発言内容はZBにとって新しい知見であることが窺える。そして9行目で、ZBはSYにそう考える理由を尋ねている。

この質問に対し、SYは「すごく ん よく聞いてくれはるん」(12)と回答し、インタビューの過程で研究者がSYなどの研究協力者の話を丁寧に傾聴することを表している。続いて、SYは「でもそれは違うよと思って 絶対言わへんし」(14)と補足し、研究者がたとえ考えが相手と一致しなくても、異論を表明しないことを説明している。さらに、SYの見解では、研究者は「それはそうだね」(16)と言いつつ、安易に相手の意見に同調したり、簡単に同意を示したりしないという。SYにとって、SYにとって心地よいのは、研究者が「ん ん ん」(18)や「なるほどね」(12)などのことばを発し、研究協力者の発言を評価せず、彼ら／彼女らが自由に話し続けられるように促すことである。この語りの特徴的な点は、SYが「でもそれは違うよ」(14)、「それはそうだね」(16)、「ん ん ん ん」(18)という3つの声を引用して、インタビュアーの傾聴する姿勢を表現していることである。これにより、これらの言葉を発する人物像が非常に生き生きと描かれている。

この発言を聞いた後、ZBは思慮深げに「なるほど そういうことか」(21)と述べる。続くSYの発言では、「なるほどね」(22)という形でこの言葉を引用し、SYが理想とする傾聴の際に使える表現の例として示している。ここでのSYの行動は、ZBの反応を認め、同意かつ承認を示す行為と解釈できる。

24 行目で、SY は「何も知らない状態で聞いてくれるから 一番助かるんです@@」(24) と述べ、評価を下さずにただ傾聴することが話し手にとっては役に立つとしている。ここで、SY は研究協力者としての立ち位置を前景化させ、理想とする研究者の傾聴姿勢について期待や助言を提示している。

ZB はこの発言を聞いて再び驚きを表し、これが本当に理想的な傾聴の姿勢だと思うかと尋ねる(「え↑ そう そういいのいいと思います?」(26))。この質問に対し、SY は前と同様に、インタビューで不快に感じる態度の例として、「そうだよね そうだね」(28) という声を挙げ、非当事者が勝手に理解したふりをして同意を示す態度を批判している。続いて、33 行目で、SY は再び、研究者がある程度の背景知識を持つのにもかかわらず、自らの意見を押し付けず、相手の経験を聴くことが望ましいと述べている。

例 3 の分析をまとめると、SY と ZB は相互行為を通じて、意見を聞く側としての研究者と、意見や助言を述べる側としての研究協力者の関係を構築している。SY は研究者の前では、自らの経験や知見を積極的に提示し、自己の専門性を主張する姿が見られた。

6. 考察

以上の分析を踏まえ、RQ (1) と RQ (2) に対応した答えを述べる。

まず、RQ (1) : SY はいかにして語りの中で自己を位置づけているのかに対応した考察を述べる。

SY の語りにおいては、語りの文脈や関係性の変化に応じて複数の「自己」が構築されている。たとえば、専門職や病院スタッフの前では、制度的権威に従属する「受動的な障害者としてのピアサポーター」という自己が現れる。一方、病棟での差別的な対応やグループホームでの管理的立場に関する語りからは、「嫌われ者としての部外者」あるいは「支援者としての威厳を保つために障害を隠す健常者的な自己」が浮かび上がる。さらに、研究者との対話においては、「語り手としての権利を持つ研究協力者」、すなわち、自らの経験や知見を積極的に共有し、対話の中で影響力を発揮する能動的な自己が現れる。これらの語りを通して、SY は状況ごとに異なる立場に自己を位置づけており、その過程でアイデンティティが流動的かつ関係性的に構築されていることが確認される。

次に、RQ (2) : SY はいかなる語りによって専門性や権威性を構築しているのかについての考察を述べる。

SY の語りは、彼女が直面する相手の属性や文脈に応じて、専門性や権威性の構築を柔軟に調整していることを示している。専門職や病院スタッフといった制度的権威を有する相手の前では、発言の主導権を握られ、受動的な立場に置かれることが多い。こうした語りには、ピアサポーターが依然として制度的には周縁化された立場にあることが示唆されている。一方で、グループホームでは利用者との関係性の中で「支援者」としての権威性を維持する必要がある、そのために自己の障害を開示せず、あえて健常的に振る舞う戦略が採られていた。このような関係性の非対称性は、山川・船越 (2020) が指摘するよう

に、現場におけるピアサポーターの役割の不安定さを反映している。今回の SY の事例では、グループホームの管理者により、共感をしないという行為をとることによって、非当事者を演じることにより、すなわち、関係性に応じて自らの権威性を「引き上げる／抑える」必要に迫られる。

さらに、研究者の前では、SY は自身の経験や知見を積極的に提示し、語りの主導権を握る場面が見られた。とりわけ、研究者に対して「知ったかぶりではなく、無知の姿勢で聴くことが話しやすさにつながる」と評価する語りには、当事者が「語る主体」として認識されたいという強い意志が反映されている。

このような語りは、Narrative-Based Medicine (NBM) の立場と共鳴する点がある。NBM においては、医師は単なる「受動的な聴き手」ではなく、患者とともに物語を構築する「証人」としての役割を担うことが求められる (Charon 2011)。同様に、SY の語りにおいても、聞き手が評価や解釈を控え、傾聴することによって、語り手は自己の経験を新たに解釈し直し、再意味化する契機を得ていると考えられる。このような実践は、単なる語りの機会の提供にとどまらず、当事者が自己の経験を「専門性」として提示する実践でもあり、それを通じて職業的尊厳 (professional dignity) を確立していくプロセスでもあったと考えられる。

7. おわりに

本稿は、周 (2024) の知見をもとに、精神障害ピアサポーターという役割の複雑性に注目するものである。ピアサポーターは、当事者であると同時に「支援者」としての専門性や権威性を求められる立場にあり、この二重の位置づけが彼らのアイデンティティ構築に独特の困難をもたらしている。本稿では、SY の語りを分析対象とし、ピアサポーターが誰と関わるか (専門職、グループホームの管理者、研究者など) によって、自身の立ち位置や提示する専門性がどのように変容するのかを明らかにした。SY の語りでは、研究者を前にしてはピアサポーターとしての経験や知見を積極的に提示し、自己の専門性を主張しようとする姿勢が見られた。一方、専門職の前では発言の主導権を握られ、受動的な立場に置かれる場面が多く観察された。さらに、グループホームにおいては、「支援者」としての権威性を保つために、自身の障害を開示せず、健常者として振る舞うことが求められていた。

こうした語りからは、ピアサポーターが状況に応じて関係性を読み取り、自己の立場を調整している様子が浮かび上がる。特に、同じ当事者である利用者に対しては、共感よりもむしろ距離をとることで権威性を保とうとし、制度的に専門性が認められた職種の前では、自身の専門性が軽視されるという構造に直面している。したがって、ピアサポーターの語りに表れる実践知の複雑さや対人スキルを、単なる「経験の共有」ではなく、専門性の一環として正当に評価できる仕組みの整備が今後求められる。

トランスクリプト記号一覧

(n.m)1 秒以上の沈黙	: 直前の音の引き延ばし	(.) 小休止
@ 笑い (個数は長さ)	.h 笑いに伴う発話	... 言い淀み
↑ 直前の音の上昇	[オーバーラップ開始	= ラッチング

参考文献

- 相川章子 (2013) 『精神障がいピアサポーター』中央法規出版.
- 岩田祐子 (2022) 「第9章 ディスクース分析」重光由加・村田泰美・岩田祐子 (編) 『社会言語学 基本からディスクース分析まで』ひつじ書房.
- 厚生労働省 (2021) 「令和3年度障害福祉サービス等報酬改定について」 URL: https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000202214_00007.html (最終アクセス:2025年5月28日)
- 嶋田珠巳・三上剛史 (2022) 「言語使用とアイデンティティ構成—社会言語学と現代社会論の交差—」『社会言語科学』25巻2号, 9-24.
- 周氷竹 (2024) 「日本における精神障害ピアサポーターのアイデンティティ構築 —インタビュー・ナラティブの談話分析—」『間谷論集』18, 61-79.
- 竹内葵和子・嶋津多恵子・野尻由香・鈴木茜 (2024) 「相談支援事業に携わる精神障害をもつピアサポーターが経験する困難とピアサポーターの活動を支える要因」『日本公衆衛生看護学会誌』13巻3号, 186-195.
- 山川あすか・船越明子 (2020) 「精神保健福祉分野におけるピアスタッフがピアサポート活動を通して経験する困難」『精神障害とリハビリテーション』24巻1号, 82-89.
- Rita Charon (2011) 斎藤清二・岸本寛史・宮田靖志・山本和利 (共訳) 『ナラティブ・メディスン 物語能力が医療を変える』医学書院.

- Davies, B., & Harré, R. (1990). Positioning: The discursive production of selves. *Journal for the Theory of Social Behavior*, 20, 43–63.
- De Fina, A., & Georgakopoulou, A. (2012). *Analyzing Narrative: Discourse and Sociolinguistic Perspectives*.
- Georgakopoulou, A. (2006). *Thinking big with small stories in narrative and identity analysis*. *Narrative Inquiry*, 16(1), 122–130.
- Vandewalle, J., Debyser, B., Beeckman, D., Vandecasteele, T., Van Hecke, A., & Verhaeghe, S. (2016). Peer workers' perceptions and experiences of barriers to implementation of peer worker roles in mental health services: A literature review. *International Journal of Nursing Studies*, 60, 234–250.
- Zimmerman, B. J. (1998). Developing self-fulfilling cycles of academic regulation: An analysis of exemplary instructional models. In D. H. Schunk & B. J. Zimmerman (Eds.), *Self-regulated learning: From teaching to self-reflective practice*, 1–19.

ⁱ 本稿は科学技術イノベーション創出に向けた大学フェローシップ創設事業 (JPMJFS2125) の助成を受けたものである。

ⁱⁱ Zimmerman (1998) はアイデンティティを、「ディスクース上のアイデンティティ (discourse identity)」、「持ち運び可能なアイデンティティ (transportable identity)」と「状況に埋め込まれたアイデンティティ (situated identity)」に分けている。

ⁱⁱⁱ 「健常者目線」は、健常者であるがゆえに当事者の立場に立って考えることができないような考え方を意味する。

日本人留学経験者が感じる「制限」とその対処¹

稲葉 皐

1. はじめに：留学という移動

21 世紀は「移動の時代」と言われている (Urry, 2007; 三宅, 2021)。人々は交通機関を使用し、国内、国外を移動する。その目的は多岐にわたり、仕事や観光、移住などが挙げられる (新井, 2021: 5)。また、インターネットやモバイル機器の普及に加え、新型コロナウイルス感染症のパンデミックで広く使用されるようになったオンライン会議などは、移動の時代におけるコミュニケーションを変化させた。移動する人々がいる一方で、自身が住んでいる場所を動かない、すなわち、移動をしない人々が存在することも事実である。しかし、このような人々もスマートフォンやテレビ等の情報通信機器で国内外の情報を目にする機会があるだろう。また、社会生活を営む中で、移動を経験した人々と日常的に関わっていると考えられる。

本研究で扱う留学は、母国以外の国で実際に生活しながら学校等に通うことから、一つの移動である。日本では、開国以降様々な目的で留学が行われてきた (石附, 1972)。21 世紀に入り、技術革新や、あらゆる分野で様々なヒト、モノ、カネが移動する時代に対応する人材として、グローバル人材の育成が求められるようになった。文部科学省 (2022) は、海外での経験や多様な価値観を持つ人々との交流が異文化に対する理解やアイデンティティの確立などにつながることから、「日本の未来を創るグローバル・リーダー人材を育成」するため、日本人学生の留学に力を入れようと試みた。このような状況により、感染症の拡大で海外に出向くことが一時的にできなくなってしまったコロナ禍まで、日本人の留学数は年々増えていた。留学は正規の学生として入学するものから、大学等で行われる交換留学、数週間の短期留学等、その種類は多様になっていた。日本人の留学経験者に関する研究は、留学によって向上した語学力や異文化コミュニケーションへの態度 (吉村・中山, 2010; 八島, 2012 など) や、留学経験がその後の収入やキャリア、雇用にもたらす影響 (新見・米沢・秋庭, 2018; 貝沼, 2018) 等の観点から蓄積されている。また、移動と留学に関する研究は、岩崎 (2021) が挙げられる。岩崎 (2021) は、言語ポートレートとナラティブ、インタビューをデータとして、英国から日本へ 2 回の留学経験を持つ対象者の言語アイデンティティについての研究を報告した。これらのデータの中では、対象者が学習者から言語の使用者アイデンティティへと言語アイデンティティを変化させた様子が示されている。また、留学中のみならず、留学後の経験からも、自身が成人アイデンティティへと変容していった様子を重ねている。このように、岩崎 (2021) では、留学という移動によることばの習得とアイデンティティの変容が分析されている。

留学という移動の経験では、母語以外の言語を習得できる可能性があり、また、岩崎 (2021) が示すように、そのアイデンティティに変化が生じる場合がある。加えて、現地での生活やそこで生活している人々との関わりを通して、留学経験者の考え方や価値観が変わっていくと考えられる。言い換えると、移動することによって生じたコミュニケーションを通して、自身や周囲の者の社会規範や価値観の相違、制度的な問題が浮き彫りになる。これらは移動を経験した留学経験者たちが、帰国後に感じる葛藤や困惑、母国の文化に対する批判等の考えは、彼ら・彼女らの自由なふるまいを制約する可能性が考えられる。本稿では、これらを留学経験者が感じる「制限」と捉えていく。

2. 研究目的とリサーチクエスション

本稿の目的は、留学経験者が留学という「移動」を経て感じた「制限」を明らかにすることである。加えて、その「制限」から、留学経験者にまつわる社会的な固定観念を明らかにし、留学経験者たちがどのようにそれらに対処しているのか実例をもとに解明する。

上記の先行研究は留学経験者の言語能力やコミュニケーションスタイル、留学後の動向を調査したものである。また、岩崎（2021）のように、インタビュー等を行い、複言語能力や獲得するアイデンティティの観点から日本に留学した人物を分析した研究が散見される。一方で、実際の日本人留学経験者の語りや、彼ら・彼女らのコミュニケーションを会話データから分析しているものは管見の限り少ない。また、留学によって培った語学力の向上や価値観の変化という肯定的な側面が描かれている研究が多い。しかし、後述のように、本研究の協力者は、留学を経て変化した自分自身と周囲の人々の反応から「制限」を抱えていることがあり、留学はかならずしも肯定的な側面ばかりではないと考えられる。

以上のことから、本稿では、①留学経験者たちは留学という「移動」を経てどのような「制限」に直面しているのか、②留学経験者たちはその「制限」をどのように受け止め、対処しているのか、という2点をリサーチクエスション（以下、RQ）として設定する。これらのRQに応えることにより、本研究では留学という移動を経験した日本人大学生のインタビューおよび会話データから、彼女たちの抱える葛藤を明らかにすることができる。

3. データと分析枠組み

本研究で扱うデータは、17名の日本人留学経験者および留学未経験者のコミュニケーションを記録しているものである。データの参加者は、留学経験者の会話場面の録画とインタビューを行うという目的で研究協力を依頼した。その後、協力者に留学経験者および未経験者の友人を紹介してもらい、調査者を含めた3人でのZoomミーティングを設定した。事前に調査協力のお願いと研究目的およびデータの取り扱いについて情報を共有し、同意を得た参加者にZoomミーティングのリンクを送った。また、データを録画する前に再度同意確認を行なった。ミーティングの流れは以下の通りである。前半に留学経験に関するインタビューを行い、後半に調査者が画面をオフにし、退出した上で、研究協力者のみでの会話場面を収集した。

本稿では、2024年2月に行われた日本人留学経験者3名によるインタビューおよび会話データから2つの場面を抜粋した（表1）。すべてのデータはZoomを通して録画され、そこで行われた会話は非言語行動も含めて詳細に書き起こされている。

表1 データ概要

抜粋	撮影日	参加者	年齢（調査時）	留学先	留学期間
1・2	2024/2/15	AM	22	オーストラリア	2023/2-2023/12
		MI	22	カナダ	2022/9-2024/4
		SI（調査者）	26	アメリカ	2018/8-2019/5
3	2024/2/21	SK	22	北欧	2022/8-2023/5
		SI（調査者）	26	アメリカ	2018/8-2019/5

本稿で分析するデータはそれぞれの参与者にとって 2 回目のインタビューおよび会話場面の収録である。2024 年 1 月 12 日に行った 1 回目の調査には AM、MI、SK の 3 人が同時に参加していた。その際に収録した会話の中で、AM が帰国後直後の親戚の集まりにて留学先の土産を渡した時に「英語を喋って」と言われたと話していた。本発表で扱うデータは上記について詳細を聞いている場面および、協力者に同じような経験の有無を尋ねた場면을抜粋している。

本稿では、Gumperz による相互行為的社会言語学を分析の枠組みとしてデータを分析する。相互行為的社会言語学は、発話を解釈するための枠組みとしてコンテキストに着目した Gumperz によって提唱されている。Gumperz (1982) は、コンテキストは会話を行っている参加者が相互行為を通じて生み出していくとしている。本稿は「会話のインタラクションを解釈する際に、人々がコミュニケーションを行うときに使う手がかりに特に注目 (岩田・重光・村田 2021 : 184)」する「相互行為的社会言語学」に基づき、談話を分析する際には、参与者の背景や彼女らが持つ社会文化規範等もコンテキストの一部として分析する。分析の際には、会話分析の細かい分析道具を活用するが、より広い社会文化的コンテキストも分析の枠組みに入れる。

4. 分析結果

4.1. 留学後に感じる周囲とのギャップ

抜粋 1 はオーストラリアに留学した AM とカナダに留学した MI に対して、約 1 ヶ月前に行われた 1 回目の調査にて、AM が帰国直後に親戚から「英語を喋って」と言われたと話していたことについて SI が再度尋ね、AM が回答する場面から抜粋が開始される。

抜粋 1) AM の語り

0024. SI: なんか、留学した人って英語喋れると思われがち。
0025. AM: う:::ん
0026. SI: かな、[と。
0027. AM: [で、なんか、留学した身としては、まだまだ、なんか、
0028. それこそ不完全燃焼というか。
0029. SI: ((頷く))
0030. AM: まだ自分の、実力、なんか実感せずに帰ってきたのに、
0031. なんか日本だとすごい喋れる人みたいになっちゃって、
0032. SI: ((笑いながら頷く))
0033. MI: ((頷く))
0034. AM: バイト先とかでも、いや、なんか、英語ペラペラですか。ε
0035. みたいに聞かれて、
0036. ((首を振りながら)) いや、ペラペラじゃないですみたいな
0037. ε行った身としては、ε
0038. SI: うん
0039. AM: なに、なんかその、1 年じゃ、
0040. SI: う:::ん
0041. AM: 現地の人みたいに喋れないんですけど、
0042. なんかすごい珍しがられるというか、

0043. SI: うんうん
 0044. AM: すごい. ((腕を振り下ろしながら)) 賢い存在みたいに
 0045. なっちゃって,
 0046. SI: @@
 0047. AM: そんなことないんだけどなって. (.) いつも思ってます.
 0048. SI: そうかそうか. そこでまたちょっと葛藤というか, うわあ.
 0049. うんプレッシャーというか
 0050. AM: 行った人なら多分わかるんですけど,
 0051. £行ってない人は£
 0052. SI: うん
 0053. AM: なんかにちょっと考え方というか. 感じ方が違うのかなと.
 0054. SI: う:::ん. なるほどなるほど, そうなんです.

まず、24 行目で調査者である SI が留学経験者は英語を話すことができると思われることが多いと話をまとめた。それに対して AM は 25 行目で「う:::ん」と言い淀みながら、27 行目から自身の経験を語り始めた。AM は、オーストラリアに留学した自分自身に対して「不完全燃焼 (28 行目)」であり、自身の英語の「実力を実感せずに帰国 (30 行目)」したにも関わらず、周囲の人から「すごい喋れる人 (31 行目)」としてみなされていると語った。その後、英語を話せる人物として扱われた経験について、34 行目から、自身のアルバイト先で「£英語ペラペラですか£」と聞かれたことに AM は笑いながら言及し、首を振りながら「ペラペラじゃない (36 行目)」と否定した様子を再現した。その後、留学経験者として、1 年の留学期間では「現地の人みたいに喋れない (41 行目)」のに、帰国後に日本で「珍しがられる (42 行目)」ことや「賢い存在 (44 行目)」とみなされ、自身は「そんなことない (47 行目)」と、周囲からの肯定的な評価を否定していることがわかる。このことに対して SI が、留学経験者は他社からの評価に対する葛藤やプレッシャーを感じることがあると 48、49 行目でまとめると、AM は「行った人なら多分わかる (50 行目)」と、留学経験者に連帯感を示し、「行ってない人 (51 行目)」である留学未経験者は「考え方 (53 行目)」や「感じ方が違う (53 行目)」と結論づけた。留学はその期間や訪れる国、形態にさまざまな種類がある (日本学生支援機構, 2024)。AM は 1 年という短い期間で英語のネイティブスピーカーのように話すことは不可能であると考えており、自身の英語力もそのようなレベルに達していないと捉えている。そのような状況にも関わらず、日本では周囲から留学すると語学ができるようになり、珍しく、賢い存在になるというポジティブな評価をつけられており、留学未経験者との考え方や感じ方の相違を認識していることがわかる。また、AM は同じ留学経験者ならこの状況を理解できるとも考えていることが見て取れる。

次に、AM の語りの直後に MI が自身の経験を述べる場面を抜粋 2 として分析する。

抜粋 2) MI の語り

0055. SI: ありがとうございます. え. MI さんはどうですか.
 0056. そういう経験ありますか. 英語喋ってよって言われるような.
 0057. (1.9)
 0058. MI: そうですね. なんか. (0.5) むちゃぶりですごい喋らされるとかは

0059. あんまり えないんですけど::え .h なんか 家族に,
 0060. なんか. お姉ちゃんとかに面白半分で今から英語で喋ろうって
 0061. AM: ((頷く))
 0062. MI: 言われたり. とか::
 0063. MI: まあ. そんぐらいですね.
 0064. SI: ((頷く))
 0065. MI: でもなんかその実際に喋るっていうよりかは, 親戚とかで集まっても,
 0066. SI: ((頷く))
 0067. MI: なんか, あ留学行ったから,
 0068. AM: ((頷く))
 0069. MI: あもうなんかすご::いみたいな
 0070. AM: ((頷く))
 0071. SI: ((頷く))
 0072. MI: 感じになって, まあ留学ってまあ色々あるし,
 0073. SI: [((頷く))]
 0074. AM: [((頷く))]
 0075. MI: 私の場合は交換留学で短かったので,
 0076. SI: [((頷く))]
 0077. AM: [((頷く))]
 0078. MI: .h なんかめっちゃ何か成し遂げたっていうよりかは, なんか.
 0079. (0.4)
 0080. MI: 経験できたな:
 0081. AM: ((頷く))
 0082. MI: ぐらいだから,
 0083. AM: ((頷く))
 0084. MI: まあ. 結構, そうですね, 留学行ったからすご::いみたいな感じで
 0085. 思われる, なんか誤解されることはなんかあるなって感じです.

調査者である SI が MI に対して、55 行目から AM のように周囲の人から英語を話してほしいと言われた経験があるかと尋ねた。すると、58 行目から MI は自身の経験を語り始めた。MI は英語を話すことを強要される経験は少ないものの、姉から「面白半分 (60 行目)」に英語を話そうと言われることがあると述べた。このように、実際に話す姿を見せることを求められることは少ない一方で、親戚などから「留学行ったから (67 行目)」「すご::い (69 行目)」と、留学経験を持っていることが大層なものであると親戚から評価を受けた経験を語った。このことに対して、AM は、「留学ってまあ色々あるし (72 行目)」と前置き、「短かった (75 行目)」交換留学期間では「めっちゃ成し遂げた (78 行目)」というよりも「経験できた (80 行目)」ことが多いとした上で、「留学行ったからすご::い (84 行目)」と思われ「誤解されること (85 行目)」があると述べた。先述の通り、留学の種類は様々なものがあり、MI は AM と同様に自身が行なった交換留学の期間を短いと捉えている。このような短期間で達成できることは少なく、それよりも留学に行き、現地で実際に経験できることの方が多いと考えているとわかる。MI にとって留学は「すごい」ものでは

以上のように、AM と MI は、留学経験者である自分自身と留学未経験者との間に考え方の相違や誤解があると認識していることが明らかになった。次節では、北欧に留学した SK の語りから、留学経験者自身も未経験者の考えが理解可能であると同時に周囲から固定観念的なイメージを持たれていることを明らかにする。

次に取りあげる抜粋3は、北欧に留学したSKのインタビュー場面である。1回目の調査でAMが帰国後親戚から「英語を喋って」と言われたと話していたことについて、SKにも同様の経験がないかSIが再度尋ねたところ、SKは「留学に行ったから英語を話すことができる」と言われたことはあるが、「英語を喋って」と言われた経験は一切ないと述べた。その後、SIが北欧に留学に行ったからこそかけられた言葉などはあるかと尋ねた直後から抜粋した。

0035. SI: なんか、なんだろう、(北欧)に行ったからかけられた言葉というか、
0036. そういう、英語話してよとかではないですけど、
0037. SK: ((頷く))
0038. SI: なんかそういうのってありますか。帰ってきてから。
0039. (1.7)
0040. SK: でもね、〈1番〉はやっぱ。@@ £寒くないの。£
0041. SI: @@@
0042. SK: £とか、hh @@ サウナ、サウナは <どうなの.> とか::£
0043. SI: ((笑いながら頷く))
0044. SK: なんかもう、そういうところですね。全然。こう、
0045. (1.2)
0046. SK: う::ん、なんか(北欧)の中身っていうよりも、こう、なんか。
0047. SI: ((頷く))
0048. SK: 外から見た感じのイメージというか、
0049. SI: ((頷く))
0050. SK: なんかやっぱ。知らない
0051. (0.8)
0052. SK: ことが多いじゃない [ですか::.=
0053. SI: [((頷く))
0054. SK: =なんかアメリカとかイギリスだったら結構こう、
0055. SI: ((頷く))
0056. SK: ニュースとかにも出てくるけど::..hhh
0057. (北欧)ってほんと未知の世界な感じが多分
0058. SI: ((頷く))
0059. SK: みんなしてて、でもなんかこう、聞いたことはあるみたいな

0060. SI: ((頷く))
 0061. SK: 国なので,
 0062. SI: ((頷く))
 0063. SK: そこについてなんか,
 0064. SI: ((頷く))
 0065. SK: えっ, 本当にこんなもの.みたいなもの. (.) はよく聞かれますね.
 0066. SI: へえ.確かに私も行ったことないからわからないこと. (0.6)
 0067. £でも同じこと£ 聞かかも. 寒い. (0.3) かな::とか
 0068. @@@@
 0069. SK: ですよ.
 0070. SI: 確かに. うん,
 0071. SK: ((頷く))
 0072. SI: (SKの留学先にまつわる人物) いたとかそういう話を.
 0073. SK: ((頷きながら)) うん
 0074. SI: ああそうですね.確かに. あんまり
 0075. SK: ((頷く))
 0076. SI: 知られてない国だからこそ,
 0077. SK: ((頷く))
 0078. SI: そんな感じの質問になるのかな, うんうん
 0079. SK: ((頷く))
 0080. うんと思います.
 0081. SI: うんうん
 0082. SK: なんか私も, 私, (北欧)の, この留学で初めて
 0083. (北欧)に行ったんですけど, £行く前まじでわからなかった.なにも.£
 0084. めっちゃ気持ちわかるなと思って::
 0085. SI: @@@@

調査者である SI が北欧に行ったからこそ周囲からかけられた言葉があるかと抜粋の冒頭で尋ねると、SK は「でもね (40 行目)」とターンを取り、「一番 (40 行目)」聞かれることとして寒さについて尋ねられると笑いながら述べた。加えて、「サウナは <どうなの.> (42 行目)」と、北欧を代表する文化の一つであるサウナについて質問されることに言及し、北欧留学に対してかけられる言葉として例を挙げた。これらの言葉について、SK は「(北欧)の中身 (46 行目)」よりも「外から見た感じのイメージ (48 行目)」であると述べ、北欧は「ニュースに出てくる (56 行目)」ような「アメリカとかイギリス (54 行目)」と異なり、「知らないことが多い (50-52 行目)」国であると語った。また、北欧は「未知の世界な感じ (57 行目)」がある一方で、様々な人々が「なんかこう, 聞いたことはある (59 行目)」国であると SK は考えていることが見て取れる。このような「未知の世界 (57 行目)」に対して「本当にこんなもの (65 行目)」と、実情を尋ねられることが多いと述べた。このことに対して、SI は、66 行目から自身も北欧に行った経験がないため、「同じこと (67 行目)」を聞く可能性があることを示唆した。また、SK の留学先が「あまり知られていない国 (76 行目)」であるからこそ周囲の人々が同じような質問をすることについて考えを述べ

た。SI の返答を受け、SK は、自身も留学先の国には初めて訪れたと述べ（82-83 行目）、「 ϵ 行く前まじでわからなかった. なにも. ϵ （83 行目）」と、笑いながら同意を示し、「めっちゃ気持ちわかかって: :（84 行目）」と、共感を示した。このことから、米国や英国のような「ニュースに出てくる（56 行目）」馴染みのある留学先に対して、北欧は、留学前の SK にとって「未知の世界（57 行目）」であり、周囲から寄せられる反応も留学前の自身と重なり、理解することが可能であると考えていることがわかる。一方で、周囲の留学未経験者からかけられる言葉は SK が留学で培った言語能力や経験よりも北欧の国に対する「外から見た感じのイメージ（48 行目）」であることが多く、固定観念的なイメージを付けられていると明らかになった。

5. 考察と結語

最後に、分析をまとめ、考察として RQ に回答する。まず、一つ目の RQ である「留学経験者たちは留学という「移動」を経てどのような「制限」に直面しているのか」について、上記の分析から、留学経験者たちはそれぞれが周囲の留学未経験者との間に考え方の相違や固定観念的なイメージを付与されていることが明らかになった。例えば、オーストラリアに留学した AM や、カナダに留学した MI は、留学期間の短さや語学力の不足という自身の認識に関わらず、周囲から「英語を話すことができる」人物であるとみなされており、「留学はすごい」や、留学経験者は「賢い存在」とであると評価されていることに言及した。また、北欧の国に留学した SK は、北欧は「未知の世界」とであるという認識から、留学経験者自身の経験ではなく、固定観念的な「外から見たイメージ」を尋ねられることが多いと述べた。これらのことから、留学経験者が感じている「制限」として、留学は大層なものであり、留学先の国やそこで行なった経験はよくわからないものとして周囲から捉えられていることではないかと考えられる。移動を経験していない留学未経験者たちから留学経験者自身の能力や留学経験に関係なくイメージとして評価されていることは、留学を経て変化した留学経験者個人を十分に鑑みていないと考えられる。

このような状況に関して、2 つ目の RQ である「留学経験者たちはその「制限」をどのように受け止め、対処しているのか」に回答する。本稿では、留学は大層なものであり、よくわからないものであると留学未経験者から固定観念的に評価されていることが「制限」とであると指摘した。留学未経験者たちはこれらのイメージを誤解であると否定する様子や、一方で周囲の人々の考えに対して共感する様子が本稿の抜粋に見られた。つまり、留学経験者たちはこのような「制限」に対して、留学未経験者たちは周囲の人々と考え方の違いを認識し、自身の体験を振り返りながらその「制限」に理解を示すなどで対処していると考えられる。本稿で明らかになった、留学経験者が感じている「制限」は、留学経験者たちの帰国後の行動になんらかの制約を課す可能性があると考えられる。例えば、本稿で抜粋したデータは、AM が親戚から英語を話してほしいと言われた経験があると語っていたことについて尋ねる質問に答える場面であった。留学経験者の中には、周囲からの期待に応えるために英語を話す姿を披露した経験がある人もいた。また、それらの期待を誤解である感じ、否定している様子から留学経験を評価されることに必ずしも肯定的な態度を示すわけではなかった。加えて、SK の語りからも見て取れるように、英語圏への留学に重きが置かれ、北欧などの国は留学先として「未知の場所」とであるとされている。実際には、留学先は多様であるにも関わらず、階層が生まれていることが考えられる。留学経験者は周囲からの期待や付与された固定観念的なイメージと、移動を経験した自身の自己評価との差に違和感や困惑を覚えている場面があると考えられる。

「移動」が常態化している現代では、様々な国に出向き、それぞれの言語を学習することや、異文化を経験できる状況になっている。また、留学生として現地に身を置くことで留学経験者の価値観等は変化する。今後は多様な留学経験者が感じる「制限」を明らかにしていく必要があると考える。

参考文献

- Gumperz, J. (1982). *Discourse Strategies*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 石附実 (1972). 『近代日本の留学史』, ミネルヴァ書房
- 岩崎典子 (2021). 「言語ポートレートから見る多層アイデンティティ – 「アイデンティティの戦争」から複言語使用者へ」 三宅和子・新井保裕 (2021). 『モビリティとことばをめぐる挑戦 – 社会言語学の新たな「移動」』, ひつじ書房. pp. 245-267.
- 岩田裕子・重光由加・村田泰美 (2022). 『社会言語学 基本からディスコース分析まで』, ひつじ書房.
- 貝沼千徳 (2018). 「留学のキャリア・雇用に関するインパクト～日本企業は留学経験者をどうみているのか～」 横田雅弘・太田浩・新見有紀子編 (2018). 『海外留学がキャリアと人生に与えるインパクト 大規模調査による留学の効果測定』, pp.211-235. 学文社.
- 文部科学省 (2022). 「高等教育を軸としたグローバル政策の方向性～コロナ禍で激減した学生交流の回復に向けて～」 https://www.mext.go.jp/content/20230323-mxt_kotokoku01-000028546_3.pdf (閲覧日: 2025 年 5 月 15 日)
- 三宅和子 (2021). 「モビリティ、21 世紀に問われる社会言語学の課題」.
- 三宅和子・新井保裕編. (2021). 『モビリティとことばをめぐる挑戦: 社会言語学の』
- 新見有紀子・米澤彰純・秋庭裕子 (2018). 「留学経験が収入や職業キャリアにもたらす効果」 横田雅弘・太田浩・新見有紀子編 (2018). 『海外留学がキャリアと人生に与えるインパクト 大規模調査による留学の効果測定』, pp. 156-178. 学文社
- 八島智子 (2012). 『外国語コミュニケーションの情意と動機: 研究と教育の視点』, 関西大学出版部.
- 横田雅弘・太田浩・新見有紀子編 (2018). 『海外留学がキャリアと人生に与えるインパクト 大規模調査による留学の効果測定』, 学文社.
- 吉村紀子・中山峰治 (2010). 『海外短期英語研修と第二言語習得』, ひつじ書房.
- Urry, J. (2007). *Mobilities*. Cambridge: Polity. (=2015, アーリ, J. 吉原直樹・伊藤嘉高(訳). 『モビリティーズ: 移動の社会学』, 作品社.)

トランスクリプト記号

(1.0)	1.0 秒の音声のない状態	ヨンの上昇
=	途切れなく密着した会話	h 呼気音
[発話の重なるの開始	.h 吸気音
:	直前の音の引き延ばし.	£発話£ 笑いながら発話
.	下降イントネーション	@ 笑い
,	継続調イントネーション	<> ゆっくりとした発話
↑	直前の発話の顕著なイントネーシ	(()) ジェスチャー等の非言語行動

¹ 本研究は 2024 年 9 月 14 日に開催された社会言語科学会シンポジウム第 5 回スチューデント・ワークショップ「第 4 室 移動とことばの諸相—移動における「制限」を軸に」の発表に大幅な修正を加えたものである。

Rethinking “ELF users”: A Narrative Analysis of Inner and Outer Circle Teachers in Japan

Atsumi Yamaguchi

1. Introduction

The increased mobility of people and goods along with the advances of communication technology has led to an unprecedented level of language contact in today’s globalized world. English has become “the global default lingua franca” (Mauranen, 2018, p. 7), distinguishing it from other contact languages due to the fact that non-native English speakers (NNEs) - those from the Outer and Expanding Circles in Kachru’s (1986) model¹ - outnumber native English speakers (NEs) from the Inner Circle. In the discipline of English as a lingua franca (ELF), interactions are seen as inherently dynamic, hybrid, and context-dependent, in line with “²translingual practice” (Canagarajah, 2013). They sometimes diverge from Inner Circle speaker norms, because ELF interactants primarily place mutual intelligibility and effective communication at the heart. Whereas the unique nature and the significance of ELF have been highly acknowledged, Inner Circle varieties continue to be privileged in especially Expanding Circle contexts such as Japan (Aoyama, 2021; Ng, 2017). In principle, anyone using English for intercultural communication is considered as an ELF user (cf. Gnutzmann, 2004). However, possibly due to earlier conceptualization of Expanding Circle speakers as ELF users (e.g., Firth, 1996; House, 1999), empirical ELF studies have largely focused on Expanding Circle speakers. This study addresses this gap by comparing two excerpts from the interview narratives of an Inner Circle and an Outer Circle speaker, with a particular focus on their pragmatic aspect of use. The study examines how ELF pragmatic acts, translingual practice, and identities discursively emerge in each participant’s narratives as interaction.

2. Literature review

2.1. *English as a lingua franca (ELF)*

The definition of ELF has evolved over the past two to three decades. Early research conceptualized ELF as interactions between members of two or more different linguacultures in English, for none of whom English is the mother tongue” (House, 1999, p.4). This study adopts Seidlhofer (2011)’s more inclusive definition: ELF as “any use of English among speakers of different first languages for whom English is the communicative medium of choice, and often the only option” (p. 7). Despite the widespread acceptance of this definition, empirical ELF studies continue to focus primarily on communication between NNEs. As a

¹ Kachru (1985) divides the presence of English into three concentric circles: The Inner Circle (e.g., the U.S., the U.K., Canada, Australia, and New Zealand), the Outer Circle (e.g., India, Malaysia, Singapore, and Philippines), and the Expanding Circle (e.g., Turkey, Saudi Arabia, Japan, China, Korea).

² Canagarajah (2013) conceptualizes “translingual practice” as the underlying orientation and set of processes that inform communicative modes in which strategies such as “code-meshing, crossing, and polyglot dialogue” are employed to achieve intelligibility (p. 6).

result, the terms “ELF users” or “ELF speakers” generally refer to NNEs who share “non-naiveness” (Hülmbauer, 2009) or “sharedness” (Nogami, 2013) as a defining characteristic. Nogami (2019), building on Hülmbauer (2009), outlines three shared characteristics of ELF users: 1) having non-native English-speaking or second language (L2) status; 2) sharing similar learner histories; 3) using strategies to enhance intelligibility even if these diverge from NES norms. While NESs could potentially possess the second and third traits, little attention has been paid to how they engage with ELF in fluid and context-dependent ways.

2.2 ELF and translingual practice

Both ELF and translingual practice conceptualize communication as situated and dynamic. While early ELF research focused on identifying core lexicogrammatical features, recent research has emphasized the fluidity and hybridity of ELF practices (Kimura & Canagarajah, 2018; Seidlhofer, 2011). Translingual practice similarly views communication as a dynamic process of meaning-making. That often involves code-meshing, shuttling across named languages and language varieties (Canagarajah, 2006; 2013). It also highlights the use of diverse semiotic resources (e.g., symbols, icons, and images) and modalities (e.g., oral, written, and visual modes) beyond words (Canagarajah, 2013; 2018). Translingual speakers strategically draw on these resources available to enhance mutual understanding in social interactions. Although ELF and translingual orientations share many similarities, they differ in several theoretical and methodological respects. One key distinction is that ELF tends to acknowledge a degree of the shared linguistic features whereas translingual practice treats diversity as the norm. Another difference lies in a degree of multimodal orientation. Whereas ELF traditionally focused on verbal communication, recent ELF scholarship has begun to address multimodality as part of analytical scope (e.g., Matsumoto, 2015). ELF users are increasingly seen as engaging in translingual practice to negotiate meaning and norms in intercultural communication (e.g., Cogo, 2021). Finally, while translingual practice reject the binary distinctions between NESs and NNEs, this paper retains these terms for analytical clarity, acknowledging their ideological and problematic nature.

2.3 Pragmatic competence in ELF

Contemporary theories of pragmatics emphasize the dynamic and co-constructed nature of meaning in context. In ELF interactions, which are often intercultural, participants often lack “core common ground,” or assumed shared knowledge (Kecskes & Zhang, 2009). Therefore, they instead need to co-construct “emergent common ground,” dynamic shared knowledge stemming from prior and/or current experience and negotiated within the current situation of interaction.

The extent to which participants achieve emergent common ground depends on participants’ agency, pragmatic awareness, and meta-pragmatic awareness. Ishihara (2019), drawing on Duff (2012) and Rogers and Wetzel (2013), refers to agency as “act of identity” (p. 163) and defines it as “dynamically negotiated capacity to act, assume new identities, or

resist certain positionings actively and purposefully (p. 162). Scholars in L2 pragmatics have long recognized the interplay between identity and pragmatic use. That is, L2 learners choose to align with or diverge from pragmatic norms of the target community in relation to their identities (e.g., Siegal, 1996; LoCastro, 1998). Similarly, ELF users make pragmatic choices by assessing situationally appropriate norms within the ongoing interactional context. Because participants derive from diverse linguacultural backgrounds in ELF communication, successful contextual assessment relies heavily on their pragmatic and metapragmatic awareness. Pragmatic awareness refers to “a cognitive ability that involves understanding the norms of appropriateness concerning the use of individual utterances to carry out speech acts and other pragmatic functions given the communicative settings and aspects of the sociocultural context” (Sánchez-Hernández & Maíz-Arévalo, 2022, p. 203). On the other hand, metapragmatic awareness is defined as the ability to “verbalize and explain pragmatic phenomena” (Sánchez-Hernández & Maíz-Arévalo, 2022, p. 203).

Another key aspect of successful ELF pragmatic acts includes speakers’ use of a range of pragmatic strategies for effective communication (Taguchi & Ishihara, 2018). Key ELF pragmatic strategies include repetition (e.g., Cogo, 2009) and paraphrase (e.g., Matsumoto, 2011) to name a few. Kaur (2017) and Kaur and Birlik (2021) also state parenthetical remarks, such as exemplifying, comparing and explaining, as playing an important role to enhance clarity. Additionally, “careful speech style”, characterized by speaking slowly and clearly, has been identified as a feature of English as a business lingua franca (BELF) communication to enhance mutual understanding (Rogerson-Revell, 2010). All in all, the deployment of these pragmatic strategies is shaped by interlocutors’ identity and agency. This study investigates how participants co-construct narratives as a collaborative enterprise and how identities evolve during this process. The analysis pays close attention to what and how aforementioned ELF pragmatic and translingual acts emerge in co-constructing storytelling.

3. Data and analytical framework

The data of this study are drawn from a larger set of 12 interviews conducted by the author with 10 English-speaking professionals from the Inner, the Outer, and the Expanding Circles. Participants included English language practitioners and Japanese administrative staff working in the same university’s English language program in Japan (an Expanding Circle country). Two participants were selected for this study (see Table 1), based on feedback from both Japanese administrative staff who identified them the easiest to communicate with, suggesting a high level of ELF pragmatic competence.

This study adopts an autoethnographic approach because the author, an English language practitioner from the Expanding Circle, was part of the team. While insider status may raise concerns about objectivity, it offers valuable insights into the research setting (Poulos, 2021). By the time of the data collection, the author had established rapport with both participants. She frequently interacted with Anthony, a full-time English language practitioner specializing in SLA, while less frequent, though cordial, exchanges with Tea, a part-time teacher at the

language program, also enrolled in a doctorate program as an international student at another local university.

The interviews were conducted in a semi-structured manner, following pre-prepared interview questions centering on conflicts or misunderstandings in workplace communication. This study conceptualizes interview narratives as interaction (Bamberg, 2004), viewing narratives as co-constructed artifacts between participants. The analysis employs positioning theory³ (Bamberg, 2004) and the small story⁴ perspective (Bamberg & Georgakopoulou, 2008).

Table 1

Participants' profiles and experiences

Pseudonym	Age	Gender	Country of origin	L1	L2	L2 experience (with who/where)
Anthony	47	M	America	English	Japanese/ Vietnamese	Japanese: 18 years (Japanese wife) Vietnamese: 3 years (local people)
Tea	39	F	Philippines	Philippine English	Visayan/ Tagalog/ Japanese (very limited)	Visayan: N/A (her family) Tagalog: N/A (school) Japanese: N/A (local people)
Interviewer	41	F	Japan	Japanese	English	English: 13 years (host families, classmates, and professors in the U.S., Canada, and Australia; English-speaking colleagues in Japan)

4. Data analysis

4.1 A narrative from an Inner Circle English speaker

In Excerpt 1, in response to the author's question about whether he had encountered any conflicts or communication issues with colleagues, Anthony described a linguapragmatic issue involving Haru's (pseudonym) way of request. Haru, a Japanese assistant manager

³ Positioning analysis (Bamberg, 2004) operates on three levels: Level 1 examines how the characters are positioned in relation to one another in the story; Level 2 considers how speakers position themselves and are positioned against the actual or imagined audience; Level 3 explores how narrators claim to be true or relevant to the normative discourses beyond their local contexts.

⁴ Examples of small stories include "telling of ongoing events, future or hypothetical events, shared events," "allusions to (previous) tellings, deferrals of tellings and refusals to tell" (De Fina & Georgakopoulou, 2012, p. 116). Small stories function as exemplifying former narratives, elaborating on argumentative points, and explaining details (De Fina & Georgakopoulou, 2012).

responsible for the administrative management of the GC, had studied in both the U.K. and in Australia for a total of 11 months. Despite his high fluency in English, Anthony noted that Haru occasionally used language that came across as less polite.

Excerpt 1

A: Anthony I: Interviewer (author)

1 A so::(0.3)let me think(0.3)
 2 yeah there's(.)there's um one(.)ah::(.) assistant manager
 3 I m-hm
 4 A he's a Japanese
 5 I m-hm
 6 A a:nd(.)when he asked somebody to do something
 7 <he sometimes uses a language(.) that is(.)not very>::
 8 ((clapping his lap repeatedly))
 9 how to say(.)>I guess yeah I would say it's not very polite<=
 10 =okay
 11 so::let's say::ah yeah@@@
 12 I oh no no no
 13 A m-hm
 14 I my facial expression <meant that>
 15 you you (.)just you said
 16 uh just you have said that
 17 Japanese people tend to be more polite than Americans but
 18 [xxxxxxx
 19 A [ah not in this [example
 20 I [yeah yeah yeah
 (omit 6 lines)
 27 A so::a a nice way might be to say um um(.)you know(.)
 28 if (.) if possible do you think you could send me that report?
 29 by Monday?
 30 I m-hm
 31 A and but on the other hand the language that I hear
 32 from this person is <something like>
 33 I need you to write that report by Monday
 34 I m-hm
 35 A sounding like this person is in a much higher position than me
 36 which he's not
 37 I m-hm
 38 A and but >the interesting thing about this person
 39 from talking to other members of the team
 40 I [m-hm
 41 A [is that the problem also exists in Japanese
 42 not only in English<
 43 I m-hm
 44 A and probably it still is an issue of pragmatics(.

Following repeated long pauses (line 1), Anthony recounts a story concerning Haru's linguapragmatic usage, employing an exemplifying strategy. At the begging (lines 2-9), Anthony carefully selects his words, frequently pausing and hedging. Notably in line 7, he hesitates, repeatedly clapping his lap while speaking slowly and using hedges (e.g., "how to say," "I guess," and "I would") to evaluate Haru's speech act of requesting. Finally, he describes it as "not very polite" rather than explicitly labeling it "impolite," suggesting an effort to maintain an objective stance and avoid potential disharmony with Haru. In line 11,

when Anthony is about to elaborate further, he stops and chuckles (“@@@”) (line 11), likely in response to the interviewer’s facial expression. Her reaction pertains to Anthony’s earlier claim that “Japanese people tend to be more polite than Americans” (line 17), which seems contradicted by the story. However, because Anthony appears to misread her expression as dissatisfaction with his story, the interviewer clarifies, saying “no no no” (line 12). This here-and-now moment makes the positionalities of “Japanese” (line 17) and “Americans” (line 17) salient and reflects both participants’ cooperative orientations, as they navigate meaning using diverse semiotic resources.

After resolving the misunderstanding (lines 21-26), Anthony begins a small story by presenting a master narrative (Andrews, 2004), which presumably shared among American professionals. This master narrative suggests a normative politeness expectation that the American professionals mitigate directness by leveraging indirect strategies, such as “if possible” (line 28), “think” (line 28), and “could” (line 28). By doing so, he attempts to present his core common ground with the interviewer, who also has experience residing in the U.S. Based on this sociocultural norm, Anthony evaluates Haru’s way of request as “not very polite” (line 9). Internationally, though, he softens his stance using the modal verb “might” (line 27) and the indefinite article “a” (line 27), indicating there are multiple acceptable ways to request. This co-constructed narrative positions Anthony as more familiar with American pragmatic norms and the interview as less so. Then, making it clear that he is presenting an opposing perspective with “but on the other hand” (line 31), Anthony contrasts this “nice way” with Haru’s phrasing, “I need you to” (line 33) using reported speech. In this part of narrative (lines 27-36), he employs the pragmatic strategy of explaining to ensure mutual understanding. Then, Anthony notes that Haru’s phrasing implies a hierarchical relationship that does not exist, with Haru holding “a much higher position” (line 36) than Anthony. Anthony’s stressed intonation of “he’s not” (line 36) suggests his initial discomfort in the storied situation.

Nevertheless, Anthony quickly reframes his negative evaluation, describing Haru’s speech as “interesting” (line 38). He then shares another small story incorporating his Japanese colleagues’ perceptions. What is interesting here is that he employs a comparison strategy to navigate between American and Japanese perspectives while shuttling across different linguacultural positions in the here-and-now moment. This reflects his rejection of native-speaker norms absolute in ELF communication. Ultimately, Anthony concludes the issue as “interesting” (line 41) and “pragmatic” (lines 42 & 44). The absence of a clear definition of “pragmatic” suggests their shared position as applied linguists who view this issue through a pragmatic lens not a personal one.

4.2 A narrative from an Outer Circle English speaker

Tea recounts two small stories in response to the interviewer’s prompt to elaborate on one of her written pre-survey responses. In the survey, she stated that she disregards the Japanese practice of presenting “a polite face and a real face.” Excerpt 2 showcases the second small

indirect or avoiding conflict style (Ting-Toomey et al., 1991) and that it potentially causes misunderstandings in intercultural communication. In line 9, Tea mimics her Japanese colleagues' annoyed facial expression, which prompts the interviewer's further laughter. She then evaluates herself as someone who is "feel (felt) sorry" (line 11) in the storied event. However, by delivering this statement while laughing, she appears to be intentionally performing the role of a "pathetic" outsider to illustrate the pragmatic complexity of the situation.

Tea then shifts to convey her dilemma, "I shouldn't have asked you now but (.) ¥why are you accommodating me anyway¥" (lines 12-13) as inner thoughts. The recurrence of laughter (lines 9 & 10) and utterances accompanying laughter (lines 7-9, 11, & 13) highlights how both participants mitigate face-threat (Glen, 2003) while jointly creating a metapragmatic "third space" (Kramsch, 2009) for discussing challenges in ELF communication. Notably, they leverage non-linguistic resources (i.e., laughter and facial expressions) to achieve effective communication. In line 15, she summarizes her feeling as being "confused" (lines 15 & 16) and presents poses a dilemma: "continue" (line 17) the interaction or "leave" (line 17). After she explained her perspectives (lines 12-17), she re-centers her colleagues' perspective in line 18. Starting with "if I leave" (line 18), she clearly illustrates how either choice-staying or leaving-would lead to offense. This, in the here-and-now situation, highlights the tension between Japanese and non-Japanese sociocultural expectations. Finally, in line 23, she concludes by echoing "in their face" and adds "you know" and "like shi::" (line 23), which clarifies that her interpretation of her colleague's paralinguistic signs is "don't talk to me right now" and emphasizes pragmatic dilemma she experienced. Based on the data analysis conducted thus far, Table 2 presents a summary of the three levels of positionings exhibited by the participants.

Table 2

Participants' three levels of positionings

	Anthony	Tea
Level 1	A NES who initially feels discomfort from a Japanese colleague's request style, but seeks to explore the underlying causes of the issue.	A non-Japanese individual unfamiliar with Japanese indirect communication styles yet eager to explore ways to avoid offending her Japanese colleagues.
Level 2	Someone who aims to be considerate and neutral toward other pragmatic norms and who prioritizes intelligibility and rapport maintenance	Someone who acknowledges localized variations in pragmatic norms and who prioritizes intelligibility and rapport maintenance
Level 3	An applied linguist who adopts American pragmatic norms as a reference point but willingly diverges from them to maintain rapport and ensure mutual intelligibility .	Someone in a third space who has developed a heightened level of pragmatic and metapragmatic awareness to maintain rapport and ensure mutual intelligibility .

Note. Similarities are highlighted.

5. Discussion

The analysis has revealed that the participants performed to some extent similar positionings at each respective level. In level one positioning, both were portrayed as common ground seekers, agents who strive for establishing emergent common ground. In level two positioning, they co-constructed their narratives with a cooperative orientation, drawing on paralinguistic resources, as part of their translingual practices. In addition, similar to Kaur (2017) and Kaur and Brick (2021), which analyzed naturally occurring ELF interactions, the participants of this study utilized a range of parenthetical remarks as part of ELF pragmatic strategies. These strategies enabled them to effectively present respective parties' pragmatic interpretations while shuttling across different sociocultural frameworks in the interactional space. In level three positioning, despite partial differences in their sociocultural identities, they similarly presented themselves as individuals who value intelligibility and rapport maintenance.

Whereas the majority of ELF studies remain focusing on non-naiveness shared among NNEs, this study showed how the participants from the Inner and Expanding Circles co-construct a position of (meta)pragmatically-aware multilinguals while successfully engaging in ELF pragmatic acts and translingual practice. The autoethnographic nature of this study likely facilitated the co-construction of a shared position, as the participants were aware that the interviewer was also navigating the complexities of ELF workplace communication. This study, however, acknowledges a limitation; that is the inability to analyze gesture and other embodied actions (e.g., facial expression, body orientation and gaze) because video-recording were not available. While the current analysis on the participants' nonverbal vocalizations (e.g., laughter and pauses) have provided valuable insights, future research should incorporate multimodal analysis so as to further enhance the understanding of ELF users' pragmatic practices.

6. Conclusion

The purpose of the present study was to discuss how Inner Circle English speakers can be conceptualized as "ELF users." From a pragmatic standpoint at least, the findings demonstrate that NESs with privileged Inner Circle varieties can successfully engage in ELF pragmatic acts relevant to successful ELF users. The Inner Circle participant displayed agency for constructing emergent common ground and engaged in translingual practice, similar to the Outer Circle participant. As Nogami (2020) asserts, anyone who uses the English language in intercultural communication can be ELF users. This study provides empirical support for the claim, showing that ELF pragmatic competence is not limited to speakers from the Expanding Circle. Meanwhile, it should not be taken for granted that all of the Expanding speakers necessarily practice successful ELF pragmatic acts. What matters is not which Kachruvian Circle speakers are from but rather the extent to which they agentively accommodate to their

interlocutors, co-construct and negotiate meaning, and resolve mis/non-understandings in ELF communication. Although this study has provided valuable insights, it focused on just two multilingual speakers' short extracts of narratives. It is hoped that more empirical studies, utilizing multimodal analysis, will investigate a variety of ELF practices, involving speakers from all Circles.

References

- Aoyama, R. (2021). Language Teacher Identity and English Education Policy in Japan: Competing discourses surrounding “Non-native” English-speaking teachers. *RELC Journal*, 54(3), 788–803. <https://doi.org/10.1177/00336882211032999>
- Bamberg, M. (2004). Talk, small stories, and adolescent identities, *Human Development*, 47, 366–9.
- Bamberg, M. & Georgakopoulou, A. (2008). Small stories as a new perspective in narrative and identity analysis. *Text & Talk*, 28(3), 377–396.
<https://doi.org/10.1515/TEXT.2008.018>
- Canagarajah, A. S. (2006). The place of world Englishes in composition: Pluralization continued. *College Composition and Communication*, 57(4), 586–619.
<https://doi.org/10.58680/cc20065061>
- Canagarajah, A. S. (2013). *Translingual practice: Global Englishes and Cosmopolitan Relations*. Routledge.
- Canagarajah, S. (2018). Translingual Practice as Spatial Repertoires: Expanding the Paradigm beyond Structuralist Orientations. *Applied Linguistics*, 39(1), 31–54.
<https://doi.org/10.1093/applin/amx041>
- Gnutzmann, C. (2004). Lingua franca. In Byram, M. (Ed.), *Routledge encyclopedia of language teaching and learning* (pp. 356–359). Routledge.
- Cogo, A. (2009). Accommodating difference in ELF conversations: A study of pragmatic strategies. In A. Mauranen & E. Ranta (Eds.), *English as a lingua franca: Studies and findings* (pp. 254–273). Cambridge Scholars Publishing.
- Cogo, A. (2021). ELF and translanguaging: covert and overt resources in a transnational workplace. In K. Murata (Ed.), *ELF Research methods and approaches to data and analyses: Theoretical and methodological underpinnings* (pp. 38–54). Routledge.
- Duff, P. A. (2012). Identity, agency, and second language acquisition. In S. M. Gass & A. Mackey (Eds.), *The Routledge handbook of second language acquisition* (pp. 410–426). Routledge.
- Firth, A. (1996). The discursive accomplishment of normality: On “lingua franca” English and conversation analysis. *Journal of Pragmatics*, 26(2), 237–259.
[https://doi.org/10.1016/0378-2166\(96\)00014-8](https://doi.org/10.1016/0378-2166(96)00014-8)
- Kachru, B. B. (1992). Models for non-native Englishes. In Kachru, B. B. (Ed.), *The other tongue*. (2nd edition) (pp. 48–74). University of Illinois Press.
- Kaur, J. (2017). Ambiguity related misunderstanding and clarity enhancing practices in ELF communication. *Intercultural Pragmatics*, 14(1), 25–47. <https://doi.org/10.1515/ip-2017-0002>
- Kaur, J., & Birlik, S. (2021). Communicative Effectiveness in BELF (English as a business Lingua franca) meetings: ‘Explaining’ as a Pragmatic strategy. *Modern Language Journal*, 105(3), 623–638. <https://doi.org/10.1111/modl.12717>

- Kecskes, I., & Zhang, F. (2009). Activating, seeking and creating common ground: A sociocognitive approach. *Pragmatics and Cognition*, 17(2), 331–355.
- Kimura, D., & Canagarajah, S. (2018). Translingual practice and ELF. In J. Jenkins W. Baker, & M. Dewey (Eds.), *Routledge handbooks* (pp. 295–308). Routledge.
- Kramsch, C. (2009). Third culture and language education. In V. Cook (Ed.), *Contemporary applied linguistics, Volume 1: Language teaching and learning* (pp. 233-255). Continuum.
- Glenn, P. (2003). *Laughter in interaction*. <https://doi.org/10.1017/cbo9780511519888>
- House, J. (1999). Misunderstanding in intercultural communication: Interactions in English as a lin-gua franca and the myth of mutual intelligibility. In C. Gnutzmann (Ed.), *Teaching and learning English as a global language* (pp. 73-89). Stauffenburg.
- Hülmbauer, C. (2009). “We don’t take it the right way. We just take it the way that we think you will understand”: The shifting relationship between correctness and effectiveness in ELF. In A. Mauranen & E. Ranta (Eds.), *English as a lingua franca: Studies and findings* (pp. 323-347). Cambridge Scholars Publishing.
- Ishihara, N. (2019). Identity and Agency in L2 Pragmatics 1. In *Routledge handbooks* (pp. 161–175).
- LoCastro, V. (1998, March). Learner subjectivity and pragmatic competence development. Paper presented at the American Association for Applied Linguistics Annual Conference, Seattle, WA.
- Matsumoto, Y. (2011). Successful ELF communications and implications for ELT: Sequential analysis of ELF pronunciation negotiation strategies. *Modern Language Journal*, 95, 97–114.
- Matsumoto, Y. (2015). *Multimodal communicative strategies for resolving miscommunication in multilingual writing classrooms*. Unpublished Doctoral Dissertation: The Pennsylvania State University.
- Mauranen, A. (2018). Conceptualising ELF. In J. Jenkins W. Baker, & M. Dewey (Eds.), *Routledge handbooks of English as a Lingua Franca* (pp. 7–24). Routledge.
- Molly, A. (2004) Opening to the original contributions: Counter-narratives and the power to oppose. In M. Bamberg, & M. Andrews (Eds.), *Considering counter-narratives: Narrating, resisting, making sense* (pp.1-6). John Benjamins Publishing Company.
- Ng, P. C. L. (2017). Overcoming institutional Native Speakerism: the experience of one teacher. In *Intercultural communication and language education* (pp. 3–15). https://doi.org/10.1007/978-981-10-7162-1_1
- Nogami, Y. (2013). Negotiation of second language identities in shifting power relations: Voices of Japanese L2 English users. *Hiroshima Journal of International Studies*, 19, 93-112.
- Nogami, Y. (2019). Identity and pragmatic language use among East Asian ELF speakers and its implications for English-medium education. In Murata, K.(Ed.), *English-medium instruction from an English as a lingua franca perspective: Exploring the higher education context* (pp. 176–197). Routledge.
- Poulos, C. N. (2021). Essentials of autoethnography. In *American Psychological Association*. <https://doi.org/10.1037/0000222-000>
- Rogers, R., & Wetzel, M. M. (2013). Studying agency in literacy teacher education: A layered approach to positive discourse analysis. *Critical Inquiry in Language Studies*, 10(1), 62-92.

- Sams, J. (2010). Quoting the unspoken: An analysis of quotations in spoken discourse. *Journal of Pragmatics*, 42(11), 3147–3160.
<https://doi.org/10.1016/j.pragma.2010.04.024>
- Sánchez-Hernández, A., & Maíz-Arévalo, C. (2022). Toward a new measurement of intercultural competence. In T. McConachy, & A. J. Liddicoat (Eds.), *Teaching and learning second language pragmatics for Intercultural understanding* (pp. 199–225). Routledge.
- Seidlhofer, B. (2011). *Understanding English as a Lingua Franca: A complete introduction to the theoretical nature and practical implications of English used as a lingua franca*. OUP Oxford.
- Siegal, M. (1996). The role of learner subjectivity in second Language Sociolinguistic Competency: Western women learning Japanese. *Applied Linguistics*, 17(3), 356–382.
<https://doi.org/10.1093/applin/17.3.356>
- Taguchi, N., & Ishihara, N. (2018). The Pragmatics of English as a Lingua Franca: Research and pedagogy in the era of globalization. *Annual Review of Applied Linguistics*, 38, 80–101. doi:10.1017/S0267190518000028

Transcription conventions

[the point of overlap onset
]	the point of overlap termination
=	no discernible pause between two speakers
(.)	pause under 2 seconds
(0.)	longer pause than 2 seconds
:	lengthy sound
?	question
—	emphasis
¥¥	speech with laughter
< >	slower speech
> <	faster speech
@	laugher
° °	quieter

日本の英語教育についてのインタビュー・ナラティブに見るポジショニング —日本人大学生英語学習者 2 名の事例をもとに—

山本 由実

1. はじめに

本稿の目的は、日本人大学生英語学習者 2 名のインタビュー・ナラティブを事例とし、彼らが日本の英語教育について語る際のポジショニングに焦点を当て、その様相を明らかにすることである。本稿の研究協力者は英語学習の当事者ではあるが、英語教育について専門的な知識を有するわけではなく、日本の英語教育を語るということにおいてはノービスであると考えられる。このような研究協力者が、不意に日本の英語教育について尋ねられ、「日本の」という国家レベルの視点を必要とされる話題を扱う際には、その語りに、世間で流布している言説への依拠や自らが内包するマスターナラティブ¹が表出されることが予想される。それら複数の声が組み込まれるであろう語りにおいて、動的に展開されるポジショニングを詳察する。また、ポジショニングに注目することで、インタビューという調査者との相互行為の中で研究協力者がどのように自らのアイデンティティを構築しているのかということも読み解いていく。

2. 研究の理論的背景とリサーチクエスション

本稿では、分析の方法論として、ポジショニング理論 (Hollway, 1984; Davies and Harré, 1990; Harré & Langenhove, 1999; Bamberg, 1997; 2004) を援用する。ポジショニングとは談話や会話における自己の立ち位置のことであり、これは固定的なものではなく、聞き手の影響を受け変化し得るものである。このポジショニング理論を分析ツールとして用いる利点は、個人やアイデンティティに関する問題だけでなく、文化的レベルにおける社会的問題や関心事に対しても同一の概念的枠組みを用いてアプローチできる点にある (Harré & Langenhove, 1999)。本稿では、インタビューの場で表出されるポジショニングを、相互行為の中で構築される可変的かつ動的なものとして捉える。また、その分析の射程を個人のレベルに留めず、その背後にある社会的問題にも広げて、分析を行なう。

分析対象とするデータは、英語にまつわるナラティブ研究の一環として行われたインタビューからの抜粋である。データ内では、筆者(調査者)が「日本の英語教育」について研究協力者の意見を求めているが、この話題は当日の話の流れで偶然出てきたもので、あらかじめ彼らに伝えられていた英語学習・使用経験についての質問項目ではなかった。そのため、研究協力者はこの問いへの回答を前もって準備してはいなかったと予想できる。ここで彼らは一学習者としての意見を尋ねられてはいるが、「日本の英語教育」というトピックは、自分自身の体験談を述べるのとは異なる視点を必要とする。いわゆる専門家のような俯瞰的な視点からの発言が求められるような話題が、不意に調査者から提供されたと言える。

このような当事者の日本の英語教育についての即時的かつ即興的な語りはこれまで十分に注目されてこなかった。従来の英語学習当事者の声を扱った研究調査は、文部科学省をはじめとする

関連機関や研究者によるアンケート調査が中心となる。日本人大学生を対象とした比較的大規模な英語学習の実態調査としては大学 IR コンソーシアム(2020) の大学生活全般についての質問調査の一部や、大学英語教育の実態を把握することを目的としたベネッセ i-キャリア (2024) がある。また、大学単位での比較的小規模な調査としては、英語授業へのニーズを探ることを主な目的とした調査 (ペニンントン, 2012; 牧野・平野, 2015; 藤田, 2020 ほか) がある。これらの質問紙調査で収集される結果は、集団全体の傾向を掴み、教育方針を策定する上で有効であるが、あらかじめ決められた質問や設問枠組みに外れる学習者の声は捨象されてしまう傾向がある。一方で、研究者などの専門家による日本の英語教育についての議論は、特に 2000 年以降に矢継ぎ早に行われた英語教育施策への批判から現行の制度についての多くの議論がなされている (大谷, 2007; 斎藤, 2007; 斎藤ほか, 2016; 久保田, 2018; 鳥飼, 2018; 寺沢, 2020; 下, 2022 ほか)。このように専門家が自ら積極的に意見を発信しているのに比べ、英語学習当事者の声は十分掘り下げて取り上げられてはこなかった。

こうした研究の知見を踏まえつつ、本稿では、質問紙調査で捉えきれない当事者の声に焦点を当て、そこから浮かび上がってくる実態を分析する。そのために、ここで二つのリサーチクエスチョンを設定する。まず、①英語学習の当事者である日本人大学生が日本の英語教育について語る際に、どのようなポジショニングをしながら語るのか、次に②彼らの語りに表出される英語の捉え方や社会的規範や価値観はどのようなものなのか、を明らかにする。これら二つのリサーチクエスチョンに答えることで、日本人大学生のアイデンティティ構築の一端を読み解いていく。

3. データの情報

本稿で扱うデータは、2021 年度より継続収集しているオンライン個別インタビューの日本人大学生 16 名の英語にまつわる語りのうち、2 名が日本の英語教育について語る部分を抜粋したものである (表 1)。インタビューはあらかじめ伝えられたいくつかの質問と、話の流れでより詳しい内容や関連する事柄に話が及んだりするなど柔軟に行なわれる半構造化インタビューの形で行われた。研究協力の募集については、大学のオンラインプラットフォーム上の研究協力依頼に任意で回答してもらう形で協力を得た。2 名のインタビューはどちらも 2023 年 2 月にオンライン会議システム Zoom を用いて個別に行われ、それらの録音・録画からトランスクリプトを作成した。

表 1: データの情報

	仮名	学年	公立・私立の別	海外渡航歴	抜粋箇所/総時間
データ 1	あきと	大学 1 年生	小中(公立)、高(私立)	なし	40:46-44:46/50:51
データ 2	まこと	大学 2 年生	小中高(公立)	ハワイへ家族旅行	20:05-23:43/43:24

研究協力者 2 名は関西地方にある私立大学の外国語学部系以外の文系学部に所属している。それぞれ調査者の担当する授業を履修したことがあり、授業内外で会話も交わしているため、両者とも調査者とある程度のラポールは築けている状態である。2 名の共通点としては、英語を好意的に捉えていることと、志望する職業での英語使用の可能性が低いと認識している点が挙げられ

る。2名の英語学習にまつわるバックグラウンドを確認しておく、データ1のあきと(大学1年生)は中学に上がるまで英語に触れた記憶がないと振り返り、留学経験もない。しかし高校で国際バカロレア(IB)のコースに入り、英語で授業を受けるようになったことで劇的に英語力が上がり、考え方の変容を得たことがデータ外で語られている。インタビュー当時の英語使用については、学生団体の仕事で海外の人と対面、及びオンラインで話すこともあると述べていた。データ2のまこと(大学2年生)が初めて英語に触れたのは小学校での授業で、あきとと同じく留学経験はないが、小学生の頃、家族でハワイ旅行に行った経験があると言う。また、普段の生活では英語で人とコミュニケーションを取る機会はないとのことだった。このように国内で小学校から高等学校までの教育を受けながらも、異なる英語学習環境にあった2名を研究対象とする。

分析においては、研究協力者が何を語るかを中心にしながら、どのように語るかということにも着目する。そのため、言語行為だけでなく非言語行為も分析の射程に入れ、マルチモーダルな視点も含めた分析を行なっていく。

4. 分析

4.1 英語を通した国際的な教育

データ1は、あきとが日本の英語教育について語る箇所である。データの前の部分では、大学での必修英語の単位取得後も英語関連の授業を履修したいということや、志望する職種に英語は必要ないが引き続き英語に関わり、さらに英語力向上を目指したいといったことが語られていた。そのような自分自身についての話が一通り終えられた後、調査者が、日本全体についての英語についてはどのように考えているのかと話題転換をして尋ねているのがデータ1である。

データ1

001. 調査者: なんか日本全体としてはどうですどう思いま↑す
002. なんかもっと英語:やるべきだと思います↑か
003. あきと: (1.0)あ:思いますね:((言い終わって笑顔になる))
004. 調査者: @[@
005. あきと: [¥ほんとに¥@
006. 調査者: それは:あの:なんという目的でなんかいろいろあると思うけど
007. 英語の(.)勉強しないといけないうって言(.)まあ言った時に:
008. まあいろんな方面のことがあると思うんだけど
009. あきと: はい
010. 調査者: どんな感じで思ってる
011. (2.0)
012. あきと: ん:まあ(.)そうっすね一番やっぱ重要なのが
013. 英語の通した先にある考え方がなって自分は(1.5)思っ
014. まあこれはバカロレアの教育の:方針ていうか(.)
015. hバカロレアのスタイルがそうなんですけど:
016. やっぱ:(.)英語(.)英語圏って言ったならあれっすけど世界の方の(.)
017. なんて言うんでしょう(2.5)なんか(2.0)
018. ()なんかいろんな視点から(.)こう考えたりとか:
019. あの:(.)なんでしょう批判的に考えたりとか:
020. こう(1.5)まあ(.)今(.)((上方に視線を向けながら))
021. 多様性っていう言葉が広がってると思うんですけど(.)
022. そういった結構意識とか価値観が強いって

023. 多分結構英語圏で(.)多いと思うので:
 024. 調査者: °うん°
 025. あきと: やっぱそういった(.)考え方(2.5)ていうのは
 026. やっぱ英語通したほうがより触れる機会が多くなると思いますし:
 027. 調査者: ((細かく頷く))
 028. あきと: そういった考え方の人が増えればいいかなあと思うので:
 029. (2.0)そうですまあ英語を(.)に(.)英語(.)教育っていうか
 030. 英語を通した(.)そ(.)なんか(1.0)
 031. 国際的な(.)教育が進めばいいかなと思いますね
 032. 調査者: う:んうんうんうん(.)できる(.)と思います↑か(.)
 033. @¥できると思いますかって変¥@
 034. あきと: ん:((唇を一字に結んで))まあでもやっぱ(.)そうっすね:
 035. これからの時代結構必要とかっていう話も(.)多分され(.)
 036. ここ(.)なんて言うんでしょう
 037. 近年(.)こう(.)グローバル化とかいって騒がれてると思うんですけど:
 038. でもやっぱり結局:(.)必要な人は必要ですし
 039. 必要じゃない人は多分必要じゃないっていうか:
 040. 調査者: う:ん
 041. あきと: 別に一生英語と:(.)関わらなくても:(.)
 042. あの:生きてく人って(.)まあいると思いますし:
 043. (2.5)そういうひ人も一定数もちろんいるわけで:(.)
 044. 別にそうすねなんか(2.5)う:ん(.)強制的にこう(.)
 045. 英語を(.)なんか(.)公用語にするぐらいまで(.)しろとは
 046. 全く思わないんですけど:
 047. 調査者: う:ん
 048. (2.0)
 049. あきと: でもまあ多分(.)ほんとに(.)グローバル化とかでこう(.)
 050. 世界への興味っていうのはすごい今いきやすい((両手を交互に振り出しながら))
 051. 時代だと思うんで日本国内にいても
 052. 調査者: う:ん
 053. (1.0)
 054. あきと: そういう興味を持った人が英語を学びやすいっていうか(.)
 055. 英語を(.)習得しやすい環境(2.0)を(.)作ことは
 056. 大事なんじゃないかなと思いますね
 057. 調査者: う:んうんうんうんうん(.)そうですね

あきとの語りからは、彼が理想とする IB 教育の思想と英語とが分かち難く結びついていることがわかる。彼は語りの中で頻繁に間をとりながら、自分の受けた教育を思い出すようにして、IB がどのようなものなのか少しずつ説明を加えながら調査者の質問に回答していく。

001-002 行目で調査者が日本全体としては英語を勉強するべきだと思うかという問いを投げかけると、あきとは1秒間ほどの間をおいて、「あ:思いますね:」(003 行目)と答え、笑顔を見せる。これに調査者も笑いで応じ、その目的を尋ねると、2秒の間の後、「英語の通した先にある考え方」(013 行目)と、英語教育をすることによって得られる IB の考え方が大変重要であると述べる。その IB の考え方とは、多角的な視点から・批判的に考えること、多様性の意識や価値観であるとし、これらは基本的に英語を通して学ぶものであり、このような「国際的な(.)教育」(030 行目)が進めばよいと言う。

この IB と英語の関係についての語りに注目してみると、このような IB の基本方針は「英語(.)

英語圏って言ったらあれっすけど世界の方の(.)」(016 行目)、「英語圏で(.)多い」(023 行目)ものであり、その身につけ方としては、「英語通したほうがより触れる機会が多くなる」(026 行目)、「英語を(.)に(.)英語(.)教育っていうか英語を通した(.)そ(.)なんか(1.0)国際的な(.)教育が進めばいいかな」(029-031 行目)と英語との関わりが繰り返し言及される。

続く箇所、調査者はあきとが述べる理想について日本社会で実現できそうかと尋ねる(031 行目)が、その後即座に「@¥できると思いますかって変¥@」(033 行目)と直前の自分の質問を茶化すような笑いとしながらの発話を付け加える。これは、直接的で敵対的とも取られかねない先の質問を和らげ、相手の発言を促すものであると考えられる。それに対し、あきとはすぐに「ん:」(034 行目)と唇を真一文字に結んで考える様子を見せ、「まあでもやっぱ(.)そうっすね:」(034 行目)とフィラー的な発話を挟み、できるかできないかという回答でなく、英語が必要でない人が一定数いる可能性に触れ、全員に強制することではないと言う。その上で、今の日本の状況について「グローバル化」(049 行目)によって「世界への興味」(50 行目)が喚起され人々が外に関心を向けやすくなっていると手を前に振り出すジェスチャーを交えて外に飛び出していくようなイメージと共に語り、そのような関心を持った人が英語を学べる環境が整備されるとよいと述べる。

4.2 単にカリキュラムとして入れてるだけ

データ 2 は、まことが日本の英語教育について語る箇所を扱う。本データの前で彼は、将来就きたい職の業務に英語は必要ないが、就職活動のために TOEIC のスコアが必要であれば受験すると述べていた。また、春休み中であったインタビュー時には、たまに洋楽を聞いたり英語の YouTube を字幕ありで見たりするだけだと自身の英語使用について説明した。

データ 2

001. 調査者: 日本(.)全体¥としてはどうだと思いますか¥
002. ¥英語¥[()]と思いま↑す
003. まこと: [あ:はい
004. 圧倒的に遅れてるなって思いますねやっぱり
005. 調査者: う:ん
006. まこと: 自分もできないながらも:
007. やっぱり政府が(.)ま国民倍增計画って謳って国民:の所得が増えたように:
008. やっぱり:(.)政府も:
009. じゃみんな英語話せるようになりましようって言って:
010. 調査者: ((2 回頷く))
011. まこと: でちゃんと:(.)英語が話せるようになったらいいなと思ったんですけど
012. 別にそういう:(.)プロパガンダとかも<なかった(.)>ですし:
013. ただ単に:英語をカリキュラムとして入れてるだけみたいな(.)[感じで:
014. 調査者: [((頷く))
015. まこと: ま 8 割ぐらいが本当は英語話せたら日本人の
016. 話したらいいのかなっていうのは(.)今後思うんですけど:
017. 調査者: う:ん ((数回頷く)) うんうんうんうん
018. へ:8 割ぐらいの人が英語(.)ま:<話せ>たり
019. 仕事で使えるぐら↑い(.)になったとして
020. まこと: ((頷く))
021. 調査者: そしたらなんかどんなふうになると思います↑か
022. (1.0)

023. まこと: まやっぱり外国人労働者とかも働きや<すい>し:
 024. 調査者: う:ん
 025. まこと: あと調べたら:その:海外の:旅行先: ↑ん(.)
 026. かい外国人が:日本に来て:困った(1.0)理↑由[(.)のランキングで:
 027. 調査者: [(数回頷く))
 028. まこと: 確か2位が:ま英語が喋れない(.)日本人が英語:会話が通じないみたいな:
 029. 調査者: °う:ん°
 030. まこと: あったんでやっぱりそこがやっぱりネックになって:
 031. ま日本が観光:国になれてないのかなってというのが(.)
 032. 調査者: う:ん
 033. まこと: 感じるはい
 034. 調査者: ん::そうですね:
 035. まこと: ((数回頷く))
 036. 調査者: それなんかテクノロジーとかで補えると思います↑か(.)@
 037. まこと: あ::えっ:と:(2.0)ま多分最近は
 038. 多分ま結構<補えれてるとは思うんですけど>:
 039. 調査者: うん
 040. (4.0)
 041. まこと: でも大事ななんか:(2.0)例えばチェックインとかは
 042. そういうなんか(.)結構(.)テクノロジーとか対策されてるじゃないですか
 043. 結構なんか[(.)英語話せる人がホテルマンにいたりとか:
 044. 調査者: [う:ん
 045. まこと: で観光で:やっぱりなんか(1.0)
 046. その自分の体験談で(.)体験談なんですけど:(2.0)
 047. ただ写真撮ってって外国人に言われて:
 048. 調査者: うん
 049. まこと: で::オッケーオッケーって言わ(.)
 050. で写真撮って:(カメラを構える仕草をしながら))
 051. でサンキューって言った後に:
 052. なんで(.)なんて返したらいいんだろうって思って
 052. ゆ本当はユアウェルカムなんですけど:
 053. オッケーオッケーって言って結局(1.5)もうオッケーしか言ってないんで
 054. 結構大学とかで:勉強したはずなのに:ユアウェルカムとかが
 055. と(.)咄嗟に出てこない(.)っていうのが考えると:(2.5)
 056. やっぱりそういう面で会話:とかでなんか:(.)
 057. 困ってるのかなって思いますね
 058. 調査者: う:んうんうんうんうん(.)そうですね:

まことは日本人の英語について、「圧倒的に遅れてるな」(004 行目)と一蹴し、それを政府が対処すべき問題だとしている。「国民倍增計画って謳って国民:の所得が増えたように:」(007 行目)と1960 年代に池田勇人内閣が実行した「所得倍增計画」を例として挙げ、池田内閣が日本国民の所得を倍增させたように、今の政府も国民の英語力向上のための施策を主導してほしかったという意見が示されている。そして、今の政府のやり方は「プロパガンダ」(012 行目)もなく、「英語をカリキュラムに入れてるだけみたいなの」(013 行目)と、不徹底で形ばかりの状態であると否定的な評価を下す。つまり、まことは、英語教育は政府が責任を負うべき問題であり、それが遂行されていないために日本の英語教育が効果を上げていないと考えていることが窺える。

続いてまことは、今後の目標として日本人の8割ほどが英語を話せたらいいと語り、そのよう

な社会の利点として、「外国人労働者とかも働きやすい」(023 行目)点と外国人観光客との意思疎通がスムーズになることで観光立国になれるという点を挙げる。ここで、まことの「外国人労働者」像が「英語で意思疎通を図れる人々」であることは、注目に値する。実際には、日本で働く外国人労働者の多くは非英語圏から来ており、英語では意思疎通の図れない者も多いⁱⁱⁱ。さらに彼は外国人観光客についても英語話者を想定している。英語が外国人との共通の言語であるというのは国の教育政策(文部科学省, 2003 ほか)や学習指導要領、それに準拠する教科書でも明示的・非明示的に繰り返し示されることであるが、まことも英語中心の価値観を内面化していると言える。

続いて 036 行目では、観光の話に関連して調査者が、外国人観光客が日本で直面する言語の問題をテクノロジーが解決できるか尋ねている。まことは一部、既にテクノロジーが利用されているとしながらも、自らの体験談を引き合いに出し、日本人にとって英語でのコミュニケーションは依然として難しいのではないかと感じたことを説明している。ここで持ち出される体験は、外国人観光客に写真撮影を頼まれたというエピソードである。カメラを構えるジェスチャーを交え語られるそのエピソードは、撮影はできたため相手の目的は達成されており意思疎通ができているが、その質が問題視されている。外国人観光客に感謝の言葉を言われた際に「オッケーオッケーって言って結局(1.5)もうオッケーしか言ってないんで」(053 行目)と学んでいるはずの他の表現が咄嗟に出てこなかったことを、残念なこととして語る。その上で、「やっぱりそういう面で会話:とかでなんか:(.)困ってるのかなって思いますね」(056-057 行目)と、自分の体験を他の日本人も同じように体験することとして一般化し、外国人観光客が日本人と英語でコミュニケーションが取れない状況があるのだらうと推測している。

5. 考察

ここまで日本人大学生 2 名の語りの分析を終えたところで、改めてリサーチクエスションを確認しながら考察に入る。まず、①英語学習の当事者である日本人大学生が日本の英語教育について語る際に、どのようなポジショニングをしながら語るのか、については、データ 1 のあきと、データ 2 のまことの両者とも、まずは日本全体を見渡すメタ的なポジショニングから、英語教育をより推し進めるべきという意見を表明した。その後、あきとは、IB という国際的な教育プログラムの体験者として自己を位置付けながらその教育を理想の形として挙げ、英語を通して批判的な思考や多様性を認める意識や価値観を涵養すべきであるとした。まことは、政府主導の英語教育政策が十分でないことを過去の経済政策と比較しながらメタ的なポジショニングから指摘した後、外国人観光客とのやりとりを実際に体験した者として、英語教育施策の不徹底を指摘する。両者はさらに、英語教育を促進すべきとする立場を取りながらも、それが日本人に一律に求められるべきではないと英語を必要としない人にも配慮を見せ、自分の立場を超えて社会全体を見渡すメタ的なポジショニングから語っていた。あきととまことは、メタ的なポジショニングと英語にまつわる体験を持つ者としてのポジショニングを行き来しながら、英語教育を国レベルで推し進めるべきという立場を支持する語りを展開していたことが明らかになった。

次に②彼らの語りに表出される英語の捉え方や社会的規範や価値観はどのようなものなのか、については、あきとの語りからは、IB=欧米と高い関連のあるものとし、その思想をより優れた

目指すべき姿として掲げ、それは「英語」を通して学ぶことができるものだという、英語をよりよい自己実現や社会実現のために必須のものと見る価値観が見られた。実際には IB はスイスで始まっており、その使用言語は英語のみに限らない。しかし、彼が日本の高校で受けた IB 教育は英語で行われていたことから、IB 教育は彼の中で英語と強く結びついているのだと言える。

次にまことの語りを振り返ってみると、英語は国策として政府が牽引していくべき事案であることが明示的に示されており、日本人の英語力の低さは政府が教育に責任を持って取り組んでいないことに起因すると感じていることが窺えた。さらに、英語は「外国人」と意思疎通を図る際に使うものとして捉えられているが、その「外国人」は多様なバックグラウンドを持った外国人ではなく、文部科学省が繰り返し掲げるように「英語が使えたら世界中の人と意思疎通が図れる」という世界観における「英語が話せる外国人」像である。この意味で、政府の方針や世間で喧伝されるリング・フランカとしての英語の重要性が内面化され、語りに表出していたと言える。必ずしも実態を表してはいないのにもかかわらず英語教育の文脈においては、英語＝国際語、英語＝リング・フランカという強い結びつきを示す言説が再生産されていることは先行研究でも指摘されている(Pennycook, 2007; 久保田, 2015 ほか)。今回の 2 名の研究協力者は自身の体験を拠り所にしながらも、英語、及び英語教育が必要というマスターナラティブを再構築していた。

6. まとめ

本稿は、将来仕事場面で英語使用を想定していない日本人大学生英語学習者が、そのような状況にもかかわらず英語教育推進の立場を取り、自分の経験を軸に語りを展開してく様子をポジションを鍵に分析した。彼らの語りを振り返ると、あきとは高校で強烈な影響を受けた IB 教育での英語を通した国際教育をよいものとし、それを自らと深く関連するものとして自らのアイデンティティを構築している様子が見られた。一方、まことは外国人観光客とのやりとりで自身の英語表現の乏しさを実感した経験を通じて、日本人にとって英語は依然として難しいものだと捉えると同時に、その背景に政府の英語教育の不徹底があると示唆していた。彼の姿勢は政府の責任を指摘しつつも自らの問題として強く捉えようとはしていない無責任ともとれる姿勢が見られ、英語使用に対する一定の距離感を持つ者としてのアイデンティティが読み取れた。

このような、個々の違いはあるが英語教育推進を支持する語りは、日本政府が喧伝する「グローバル時代には英語が必須である」というマスターナラティブを内包した結果とも言える。加えてその英語レベルは単に意思疎通が図れるだけでなく、データ 2 のまことの語りからわかるように、より高次の英語力が想定されている。ただ、2 名は、現在の英語教育が十分ではないとしながらも非難しているわけではなく、結果的にやんわりと今の状況がベストではないことを指摘するにとどまっている。これは、現代日本社会において英語が必ずしも日常的・職業的に必要とされていないという感覚を研究協力者が持っていること、さらに彼ら自身が英語で不利益を被った経験がなく、むしろ受験等において英語のスコアが有利に働いたという成功経験を有していることが背景にあると考えられる。このような英語への好意的な見方と緩やかな繋がり感覚は、山本(2022; 2025)で論じられた研究協力者のシニア女性や大学生とも共通するものである。今後もさらに事例研究を進め、英語が日本人英語学習者の考え方や価値観、アイデンティティにどのよう

に影響を及ぼしているのか検証していきたい。

参考文献

- Andrews, Molly (2004). Opening to the original contributions: Counter-narratives and the power to oppose. In M. Bamberg, & M. Andrews (Eds.), *Considering counter-narratives: Narrating, resisting, making sense*, pp.1-6. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Bamberg, Michael (1997). Positioning between structure and performance. *Journal of Narrative and Life History*, 7(1-4), 335-342.
- Bamberg, Michael (2004). Form and functions of 'slut bashing' in male identity constructions in 15-year-olds. *Human Development*, 47(6), 331-353.
- ベネッセ i-キャリア (2024). 「大学生の英語学習意識について」に関する調査. https://www.benesse-i-career.co.jp/news/20240404_1release.pdf
- 文化審議会国語分科会 (2022). 地域における日本語教育の在り方について(報告). https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/pdf/93798801_01.pdf
- 大学 IR コンソーシアム (2020). 「一年生調査 2019 年」「上級生調査 2019 年」基礎集計結果. 2020.10.23 https://irnw.jp/images/home/HP%E7%94%A8_%E5%9F%BA%E7%A4%8E%E9%9B%86%E8%A8%882019_20201023%E6%94%B9%E8%A8%82.pdf
- Davies, Bronwyn, & Harré, Rom (1990). Positioning: The discursive production of selves. *Journal for the Theory of Social Behaviour*, 20(1), 43-63.
- 藤田恵里子 (2020). 非英語専攻学習者の英語学習に対する意識調査. 江戸川大学紀要, 30, 507-515.
- Harre, Rom, & Langenhove, van, Luk (Eds.) (1999). *Positioning theory*. London: Sage.
- 波多野一真 (2019). 人間主義経営の視点から見る外国人労働者の言語問題. 創価経営論集, 43(2), 45-54.
- Hollway, Wendy (1984). Gender difference and the production of subjectivity. In J. Henrique, & W. Hollway, & C. Urwin, & C. Venn, & V. Walkerdine (Eds.) *Changing the subject: Psychology, social regulation, and subjectivity*, pp.227-263. London: Routledge.
- 久保田竜子 (2015). グローバル化社会と言語教育: クリティカルな視点から. くろしお出版.
- 久保田竜子 (2018). 英語教育幻想. ちくま新書.
- 牧野真貴・平野順也 (2015). 英語リメディアル教育を必要とする大学生を対象とした英語学習意識調査. 教養・外国語教育センター紀要 外国語編, 6(1), 39-55.
- 文部科学省 (2003). 「英語ができる日本人」育成のための行動計画. 2003.3.31. https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/04031601/005.pdf
- 大谷泰照 (2007). 日本人にとって英語とは何か: 異文化理解のあり方を問う. 大修館書店.
- Pennycook, Alastair (2007). The Myth of English as an international in language. In S. Makoni, & A. Pennycook (Eds.), *Disinventing and Reconstituting Languages*, 90-115. London:

Multilingual Matters Ltd.

ペニンントン和雅子(2012). 学習者が大学で「英語」を学習する目的意識の調査報告. 西南学院大学
言語教育センター紀要, 2, 3-19.

厚生労働省 (2023). 「外国人雇用状況」の届出状況表一覧 (令和4年10月末現在)
<https://www.mhlw.go.jp/content/11655000/001044544.pdf>

斎藤兆史 (2007). 日本人と英語: もうひとつの英語100年史. 研究社.

斎藤兆史・鳥飼玖美子・大津由紀雄・江利川春雄・野村昌司 (2016). 「グローバル人材育成」の
英語教育を問う. ひつじ書房.

千頭聡・祖父江カースティ (2019). 外国人雇用の実態と地域教師会に向けての日本語教育の課題.
知多半島の歴史と現在, 23, 37-55.

下絵津子 (2022). 多言語教育に揺れる近代日本: 「一外国語主義」浸透の歴史. 東信堂.

寺沢拓敬 (2020). 小学校英語のジレンマ. 岩波新書.

鳥飼玖美子 (2018). 英語教育の危機. ちくま新書.

山本由実 (2022). シニア世代の英語学習・英語使用についてのナラティブ分析—70代女性の語り
に表出されるアイデンティティ—. 立命館言語文化研究, 33(3), 303-321.

山本由実 (2025). 日本人英語学習者の英語のイメージをめぐるナラティブ分析—留学経験のない
大学生英語学習者の語りより—. 社会言語科学, 27(2), 19-34.

トランスクリプト記号

(.)	1.0 秒以下の沈黙	(1.0)	数字の秒数の沈黙
:	長音	::	長めの長音
@	笑い	¥--¥	笑いながらの発話
[オーバーラップが始まる箇所	=	続けて聞こえる発話
<-->	周囲よりも遅い発話	°--°	周囲よりも小さい声の発話
↑	音の上昇	()	発話の内容が聞き取れない箇所
(())	非言語行動の説明		

ⁱ Andrews (2004) は、マスターナラティブ(master narratives)は人々に規範を示すもので、人々はその規範に則って自身や他人の経験を理解するという。また、マスターナラティブは人々に内面化され、意識的／無意識的に再生産される。

ⁱⁱ ここでの「プロパガンダ」とは政策を強く推し進める方策といったような意味だと考えられる。

ⁱⁱⁱ 厚生労働省 (2023) によると、日本で働く外国人労働者の出身国上位3カ国は上から順にベトナム(25.4%)、中国(21.2%)、フィリピン(11.3%)と約半数に上る。これらの外国人労働者は日本語・英語での意思疎通が難しく、日本語教育支援が必要なことが先行研究で論じられている(波多野, 2019; 千頭・祖父江, 2019)。文化庁も東南アジアからの在留外国人の増加傾向に対応し、日本語教育を中心に「生活者としての外国人」の支援を各自治体に要請している(文化審議会国語分科会, 2022)。

配信者オンラインファンコミュニティにおけるアカウント使用と規範 —X 上の投稿の談話分析を通じて—

岸田 月穂

1. はじめに

2020 年代の現在に至るまで、電子メディア及びインターネットは急速に発達を続けている。1990 年代には、インターネットと移動体通信が融合し、メディアスケープは大きく変容を遂げた（木村, 2018）。2000 年代にはソーシャルメディアが発達し、オンラインコミュニケーションが盛んに行われるようになっていく。それと同時に、オンライン上では、絵文字の使用（西村, 2020）、既読スルー（宇宿他, 2019）など対面の場合でのコミュニケーションとは異なる言語実践が観察されるようになった。アカウントを使い分ける「複数アカウント使用」もオンライン空間独自の言語実践の 1 つである。複数アカウント使用に関する先行研究では、SNS ユーザーが自身の印象を管理するためにアカウントの使い分けを行っていること、メディアイデオロギーに基づく規範との関係性が明らかになっている。その一方で、アカウント使用とコミュニケーションの規範の関係性については明らかになっていない。

本稿では、SNS 上で歌やゲームなどのコンテンツを投稿する配信者を応援するコミュニティ（以下、対象ファンコミュニティ）に所属するファンが行う「アカウント」に関する投稿に焦点を当て、①ファンが SNS 上のコミュニケーションの場合である「アカウント」に対して抱いている認識、②「アカウント使用」に対する規範意識、③規範意識の背景にあるオンラインコミュニケーションの規範を明らかにする。特定のコミュニティにおける規範の事例検討を行うことを通じて、複数アカウント使用という SNS 上の実践についてコミュニケーションの観点から理解することに寄与することを目指す。

2. 先行研究

2.1 オンラインコミュニケーションにおける規範

Ahearn (2021) は、「オンラインコミュニティにおける言語使用、価値観、優先順位は、そのコミュニティが存在する社会の文化的規範によって形作られる」（p.170, 筆者訳）とオンラインコミュニティにおいて規範が果たす役割を指摘している。Herring (2007) は、オンラインコミュニケーションに関わる規範を「集団の形成方法に関係する公式または非公式な管理上の規約である組織的規範」、「コンピュータを介した文脈に規範的に適用される行動基準を指す社会適切性の規範」、「特定のグループやユーザーに通用する言語的慣習である言語の規範」（Herring, 2007: 21, 筆者訳）に分類している（表 1）。これらの規範は明示的に示される場合もあれば、コミュニティの中で暗黙に共有されている場合もあると指摘している。

表 1.オンラインコミュニケーションの規範 (Herring, 2007 をもとに筆者作成)

規範	概要・例
組織的規範	新しい構成員の加入方法、公式な役割を果たす人物、メッセージの配信・保存方法、不適切な振る舞いに対する処罰方法
社会適切性の規範	ネチケット、FAQ（よくある質問）
言語の規範	省略語、頭字語、インサイダージョーク、特定の談話ジャンル

対象ファンコミュニティとこれらの規範の関係性について概観する。末岡（2019）は、Twitter 上のオンラインコミュニティの特徴として、「自分自身を軸にしたフォロイー・フォロワー関係によって形成される」、「オンラインコミュニティ加入、脱退の手続きを行わない」、「『関心』を軸にオンラインコミュニティを築いている」（末岡,2019:30）ことを挙げている。対象ファンコミュニティは、SNS を起点に広がるコミュニティであり、末岡（2019）が指摘した特徴を持ち合わせている。したがって、各構成員が対象ファンコミュニティでの規範構築に寄与していると言える。また、水沼他（2013）は「Twitter 上のマナーや行動規範は個人の自由意思に任されたゆるやかなルールのようなものである」（p.36）と結論付けた。したがって、対象ファンコミュニティにおいて規範は明示的あるいは暗黙裡に共有される一方で、その遵守に関しては個人の自由意思に委ねられる側面がある。その一方で、規範に逸脱した場合、通報機能等によって構成員が団結して行う処罰も存在し、X 上のオンラインコミュニティにおいて組織的規範は構成員個人が担うものとして機能している。

ファンコミュニティにおいても、明示的・暗黙裡に規範が共有されている様子が観察される。長谷川（2004）は、「冬のソナタ」の掲示板のエスノグラフィー調査を通じて、ネタバレ禁止という明示的な規範に加えて、ネタバレに対する相互監視や自主規制を行うべきであるという暗黙の規範が構築されていることを明らかにした。大野（2007）は、ファンコミュニティの本質は構成員間の絆の強さや帰属意識ではなく、「コミュニティにおける他者の行動、そこでの規範、儀式や伝統などを認識した上で、自らの行為を作り上げ、自我を確立していくことである」（p.52）とファンコミュニティにおける規範の理解の重要性を指摘している。本稿で分析対象とする対象ファンコミュニティは、SNS の普及によって登場した現代的なコミュニティであるが、規範の重要性は同様であると予想される。本稿では、対象ファンコミュニティのファンが行うアカウントに関する投稿の背景に存在するオンラインコミュニケーションの規範の様相を明らかにすることを目指す。

2.2 アカウント使用に関する先行研究

若者を中心に SNS 上で複数のアカウントを使い分けることが一般化している（「現代用語の基礎知識」編集部, 2021 : 220）。このような状況下で複数アカウント使用に関して、研究が蓄積されている（青山, 2017; 若狭, 2018; 藤田他, 2024）。青山（2017）は、SNS の使い分けに焦点を当てながら大学生のアカウント使用の実態について質問紙調査を行った。その結果、57.9%の X アカウントを所持する大学生が目的に応じて複数のアカウントを使い分けていることが明らかになった。アカウント使用の目的は日常の投稿（77.4%）、趣味の投稿（75.2%）、愚痴の投稿（32.2%）、特定の友達グループでの投稿（27.9%）に大別される。若狭（2018）は、複数の SNS の使用や、同一 SNS 内でのアカウントの使い分けを「SNS の使い分け」とし、自己呈示の観点からその実態を分

析した。分析の結果、SNS の使い分けは、「SNS に設定されている状況の定義に対応した自己を『適切に』呈示し続けるために、それぞれの相互行為の場面を並列して維持する取り組み」（若狭, 2018: 116）であることが示唆された。藤田他（2024）は、実際に第一著者が X で投稿した内容を分析し、表のアカウントでは、投稿が与える印象を曖昧にするのに対し、裏アカウントでは投稿が与える印象を限定するという印象管理の手法を明らかにした。以上の先行研究から、SNS ユーザーはアカウントの目的・性質に応じて、アカウントが存在する場に適切な自己の側面を呈示していることが示唆されている。また、大学生の Instagram ユーザーが行うメインアカウントと「第二のアカウント（finsta）」の使い分けを調査した Ross（2019）は、finsta はメインアカウント使用に存在する「『いいね』を獲得するための、社会的規範や圧力、メディアの物質的制約やアフォードダンスに形作られたルール」（p.359, 筆者訳）から逃れるために行われていることを明らかにした。このことから、アカウントにおける自己呈示はメディアイデオロギーが形づくる規範に基づいて行われていることが明らかになった。

これらのアカウント使用に関する研究の特徴として、複数アカウント使用の実践への着目、半構造化インタビューの実施、メディアの特性への着目の 3 つが挙げられる。アカウントの使い分けだけではなく、アカウント使用自体にもコミュニケーションの規範が現れる可能性があるため、本稿では、「アカウント」という場について言及している投稿を取り扱う。若狭（2018）は、半構造化インタビューについて「『自然主義的観察』とは異なるものであり、そこから得られる知見については仮説の範囲をでることはない」（p.118）と半構造化インタビューの限界に言及している。また、若狭（2018）は、SNS の利用構造を相互行為的観点から理解するためには、SNS の構造と規範、利用者の実践という 3 つの次元からの検討が必要であり、経験的なデータを用い、規範の視点を組み込んだ包括的な SNS 利用行動の分析が課題であると指摘している。本稿では、SNS 上の投稿の自然主義的観察を通じて、複数アカウントに関するコミュニケーション規範に焦点を当てる。

3. 研究目的と研究設問（RQ）

先行研究においては、「いいね」獲得など SNS の構造と規範の関係や自己呈示に関する研究が蓄積されているが、コミュニケーションの規範との関係性を捉えた研究は管見の限り存在しない。本稿では、アカウント使用の背景に見られるコミュニケーション規範に着目することで、アカウント使用の分析に相互行為の観点を取り入れることを目指す。

本稿では、筆者が調査を行っているオンラインファンコミュニティのファンが行うアカウントに関する投稿に対する談話分析を実施することで、アカウントやその使用方法に対する認識及びその背景にあるコミュニケーション規範を特定する。そのために以下の RQ（研究設問）を設定する。

- RQ1 ファンは、アカウントをどのような場として認識しているか
- RQ2 ファンは、アカウント使用に対してどのような規範意識を抱いているか
- RQ3 ファンが抱くアカウント使用に対する規範意識の背景には、どのようなオンラインコミュニケーションの規範が存在しているか

以上の研究設問の解明を通じて、オンラインコミュニケーションにおいて主要なコミュニケーションの場である「アカウント」と特定のコミュニティの規範の関係性を明らかにす

る。

4. 調査方法・データ概要

筆者は、SNS 上で歌やゲームなどのコンテンツの投稿・配信を生業とする配信者を応援する対象ファンコミュニティに対してエスノグラフィー調査を実施している。筆者は、2.5 次元配信者アイドルグループの 1 つである「すとぷり」を応援するファンであるため、この調査はオートエスノグラフィーの要素を持ち合わせている。筆者は、研究協力者と X (旧 Twitter) 上でフォロイー・フォロワー関係になり、SNS 上や対面イベントでの交流を重ねた後に、研究協力を要請した。表 2 は、研究協力者の基礎情報である。

表 2.研究協力者基礎情報¹

研究協力者	年齢・性別	職業	居住地	ファン歴
A	20 代前半・女	パート	関東地方	5 年
B	10 代後半・女	大学生	関西地方	8 カ月
C	20 代後半・女	会社員	関西地方	5 年
D	10 代後半・女	大学生	関西地方	7 年
E	30 代前半・女	パート	北海道・東北地方	3 年
F	20 代前半・女	ネイリスト	関東地方	7 年
G	10 代前半・男	学生	中部地方	4 年
筆者	20 代前半・女	大学院生	関西地方	5 年

(2025 年 5 月 10 日時点)

研究対象者が自身の X アカウントにおいて 2025 年 4 月 26 日時点までに行った「垢」という語を含む投稿を収集した。「垢」とは SNS のアカウントを表すネットスラングである。現在、「リアル友人・知人と繋がる本垢」、「友人知人には存在を隠す裏垢」、「ネガティブ投稿が多い病み垢」、「趣味用の趣味垢」、「恋愛投稿中心の恋垢」の存在が指摘されている（「現代用語の基礎知識」編集部, 2021）。収集した投稿は、62 件（A: 14 件、B: 1 件、C: 30 件、D: 8 件、E: 9 件、F: 1 件、G: 1 件）である（2025 年 4 月 30 日時点）。そのうち、研究協力者が自身のアカウントの性質や使用方法について言及している語り 6 件（A: 4 件、D: 2 件）に対して談話分析を実施する。X 上での投稿を分析対象とすることで、先行研究で課題とされていた SNS 上の投稿の自然主義的観察の一助になると考えられる。また、筆者が当事者の立場から研究協力者の投稿を分析対象とすることで、アカウントの位置づけの把握ができるとともに、客観的にアカウント使用の実態を分析できると考えられる。

5. 分析結果

表 3 は本稿で分析するデータの投稿を行った研究協力者 A、D が X で使用しているアカウント情報である。表 3 において太字で示したアカウントは、研究協力者が応援対象の配信者に関して最も多くの投稿を行っているアカウントであると同時に、筆者との交流が行われているアカウン

トである。本稿で分析する 6 件の投稿はすべて太字のアカウントで行われたものである。

表 3.アカウント情報（抜粋）²

協力者	年齢・性別	ファン活動開始年	ファン活動で使用している X アカウント
A	20 代前半・女	2020 年	推し事兼趣味垢 ・日常垢（非公開） ・ジャニーズ ³ 垢
D	10 代後半・女	2018 年	推し垢 ・雑多垢

分析に先立って、研究協力者 A、D のアカウント使用について概観する。A は、配信者のファンであると同時に、ジャニーズに所属するアーティストのファンでもある。2025 年 5 月 7 日現在、A は配信者を応援するアカウント（推し事兼趣味垢）とジャニーズグループを応援するアカウント（ジャニーズ垢）を区別し、さらに自身の日常について投稿するアカウント（日常垢）を作成している。A は一時期、推し事兼趣味垢でジャニーズに所属するアーティストに関する投稿を行っていたことがある。したがって、A は、推し事兼趣味垢で複数の応援対象に対するファン活動を行っていた時を経て、現在の応援対象ごとにアカウントを分けるという運用方法に至っている。D は、応援対象のイラスト（ファンアート）を描く「絵師」であり、D は配信者グループを応援するアカウント（推し垢）とアニメキャラクターなど様々な応援対象を応援するアカウント（雑多垢）の 2 つを使い分けている。

5.1 アカウントの使い分け

A は、推し事兼趣味垢において、アカウントの運用方法を変更することをフォロワーに知らせる A1 及び A2 の投稿を行った。この投稿は、A が推し事兼趣味垢において、ジャニーズの応援対象に関する投稿を行うとした時の投稿である。

A1:【ご報告】この度、他界限の推しもプロフに記載しこちらの垢でも推し事をさせて頂く形にしました🙇♀️もし嫌な方いらっしゃいましたらフォロー外して頂いても構いません💧よろしくお願い致します🙇

A2: ちなみに湧く時は鍵垢に行きます🔄リプ、お祝いツイはここですますよというお知らせでした🙇♀️

A は、自身のコミュニケーションの場（SNS アカウント）における振る舞いの変更について語っている。A がアカウントの使い方を規定する背景には、コミュニケーションの場を目的に応じて明確に切り分けなければならないという規範が存在していると考えられる。その一方で、A は別の応援対象であるジャニーズグループに関する投稿を同じアカウントですするという決断を下している。この決断の背景に存在する A の事情は不明であるが、A が規範を逸脱し受け手に不快な思いをさせないように配慮を行っていることは明確である。A1 の語りは、【ご報告】という表題から始まり、「よろしくお願い致します」で締めくくられている。このような報告等を行う際に見られる定型文の採用によって、読み手（他のファン）に丁寧にアカウントの運用方法変更の旨を

伝えている。また、A は、👩、👤などの絵文字の使用を通じて、アカウントの運用方法変更について受け手に理解を求めている。その一方で、自分のフォロワーをやめることを認める発言を行い、理解を強制しないという態度を表明している。この A1 の投稿に対し、筆者は、「把握だよ」とリプライを送り、A は筆者がアカウント運用方法の変更を承諾したと判断し「ありがとう」と感謝の意を伝えている。この一連のやり取りは、A は、アカウント運用方法をめぐる交渉をフォロワーに行い、筆者がそれを受容した過程である。この過程から、対象ファンコミュニティにおける「他の応援対象に関する投稿を同一アカウントで行うべきではない」という規範は、当事者間（フォロワー間）の交渉によって変動し得る緩やかな規範として機能していることが示唆された。

A2 は、A1 の報告に対する補足である。他の応援対象に「湧く」時は、日常垢（鍵垢）に移動するとアカウントの使い方を定義している。沸く（湧く）とは、「感情が高ぶる、熱狂して騒ぎ立てる」（デジタル大辞泉）という意味を持つ。つまり、A は別の応援対象に対して感情的な自己を見せないことをフォロワーに表明している。この表明から、共通の応援対象に対する関心で繋がっている推し垢のフォロワーに対して、「無関係な自分の感情を吐露する」という過剰な自己呈示を避けることで、適切な距離感を保とうとする A の意識が示唆された。

A3 及び A4 は、鍵垢にしている「日常垢」についてフォロワーに説明する投稿である。

A3：サブ垢のフォロワー内にネッ友さんは一人しかいない笑

A4：サブ垢、完全に日常って感じだけどそれで良ければ DM までどうぞ

A3 及び A4 において「日常垢」が「サブ垢」と定義されていることから、A にとって「推し事兼趣味垢」でのファン活動が生活の大きな部分を占めていることが分かる。A は、日常垢をネッ友（インターネット上で知り合う友達）ではなく、対面での交流をきっかけとした友達とコミュニケーションをとる場として使用している（A3）。また、日常垢は非公開アカウントであることから、A にとって自分のフォロワーのみに見せたい自己が呈示される場（より私的な場）となっている可能性が高い。A は、ネッ友が多い「推し事兼趣味垢」において、「日常垢」でフォロワーになる人を募集しており、A は、自身の私的な側面をネッ友に開示する意思があることが分かる。以上の分析から、A は応援対象に応じてアカウントを使い分けることに対して意識的である一方で、自身の日常をネットの友達に提示することに対しては比較的緩やかな認識を持っていることをフォロワーに呈示している。

A の投稿に関する分析から、「応援対象ごとにアカウントを使い分ける意識」、「私的な自己の側面の呈示に対する意識の違い」があることがわかる。前者は対象ファンコミュニティに特有のアカウント使い分けに関する規範であることが示唆された。後者は、ファン同士の関係性構築に関する規範と関与している可能性がある。SNS では、共通する興味によりつながることができ、会ったこともない人に仲間意識を持つことで、かえって心の内を明かすことができる（井上他,2022）。A の日常垢で推し垢のフォロワーと繋がる行動は、共通の関心によって繋がる人々に自身の心の内を開示したいという A の欲求の現れである。その一方で、A は推し垢のフォロワー全員と繋がろうとしているのではなく、A の DM に連絡した人と日常垢のフォロワーになると説明している（A4）。この投稿は、日常垢で繋がる人は、A とより親しい関係性であるということをフォロワーに伝える投稿として機能していると考えられる。

5.2 推し垢での愚痴の語り方

D は、配信者を応援している推し垢において「愚痴」を話す際の語り方についてフォロワーに提示し（D1）、実際にその語り方を採用している様子（D2）が観察された。

D1：出来るだけこの垢マイナスなこと言いたくないし推しに対する愛だけ呟きたいから、大体あふれた愚痴からの推しへの愛っていう急カーブさせてるけど最近精神終わりすぎてきつーでも推しは好きー推しがいるから命は保てるー

D2：すごいこの垢の内容に関係ないこと言うけど最近塾に金がなくて行けないことが判明してでもこのままだとやばいと言われるだけ言われて体験終えたけど苦手な数学をネットで勉強してたらしぬほど分かりやすいの見つけた人生なんとかなるぜ精神で生きる～👊頑張ろ来年度の受験生～👊❤️

D は、D1 において愚痴などの「マイナスなこと」を投稿する時は、最終的に推しへの愛の語りには終着させるという自身の語りの手法についてフォロワーに提示している。D2 は、D1 の投稿の約 1 カ月後に行われた投稿である。投稿の本题に入る前に、「この垢に関係ないことを言う」と前置きを行ってから日常生活での愚痴を語っている。このことから、D はアカウントに関係のない内容を稿することに躊躇いがあることが示唆されている。また、前半は愚痴/ネガティブな内容（塾にお金がなくて行けない上に現状が好ましくない）であるが、後半はポジティブな物語（ネットで勉強してたら良い教材を見つけ人生なんとかなるという精神になった）に転換され、最後には「がんばろ来年の受験生」と自身と同じ境遇にある来年度の大学受験生にエールを送る形で締めくくられている。愚痴を肯定的な内容（推しへの愛、自身の成功体験など）で締めくくるという語り方の背景には、「ファン活動用のアカウントにおいて自身の暗い側面を提示することは好ましくない」という D の規範意識が現れている。また、若狭（2018）は、愚痴について、オーディエンスの面目を潰す可能性のある話題であるため SNS ユーザーは取り扱わないようにしていると指摘されている。したがって、D がこのような語り方を採用した背景には、「愚痴を投稿することで受け手に不快な思いをさせてはならない」というコミュニケーション規範が存在する可能性がある。D2 において D は愚痴を語っているためこの規範に違反している。規範の違反による受け手の面目の侵害を回避するために、ポジティブな物語に転換するという語りの手法を採用していると考えられる。愚痴は受け手の面目侵害に繋がる危険性がある一方で、私的な側面の呈示によって親密性を高め得るものでもある。したがって、D のポジティブな物語に帰結させる語りは、愚痴が与える他者の面目の侵害を回避すると同時に、フォロワーとの関係性を深める効果を高めるメッセージとして機能する可能性がある。

5.3 分析総括

研究協力者 A と D はいずれもアカウントを使い分けている。A は、ファン活動用のアカウント 2 つと日常を開示するアカウント、D はファン活動用のアカウント 2 つを使い分けている。A と D はどちらも応援対象ごとにアカウントを使い分けている。A は異なる応援対象に対する投稿を同一のアカウントで行うことへの抵抗、D は愚痴や日常生活を投稿することに対して躊躇いを抱いている。別の応援対象の話題や日常生活の愚痴などの無関係な情報をコミュニケーションの場

に氾濫させることへの抵抗は、Grice の量の格率 (Grice,1972) への違反への抵抗であると捉えることができる。また、D は、配信者を応援するアカウント内で、愚痴に言及する際に「最後にポジティブな結末でしめくくる」という語り方をフォロワーに呈示するという行為を行っている。これは愚痴によって受け手(フォロワー)の面目をつぶすことに対する配慮であると考えられる。したがって、D の投稿からは相手のフェイスに配慮しなければならないというコミュニケーション規範の存在がうかがえる。特筆すべきなのは、A と D はこれらのコミュニケーション規範を逸脱することを認識しながらも、アカウントの目的とは異なる自己の側面をフォロワーに呈示している、もしくは呈示しようとしている点である。この背景には、ネット上の友達であるフォロワーと親密な関係を築きたいという欲求があると考えられる。その一方で、受け手の面目の侵害に配慮し、フォロワーとの適切な距離感を保とうとする実践も観察された。

6. 考察

本稿では、対象ファンコミュニティに所属するファン 2 名のアカウント使用の語りに現れる規範を考察した。2 人は、推し垢において、応援対象に対する投稿だけではなく、自身の日常や私的な側面を呈示している。これは、趣味と日常の投稿によってアカウントが使い分けられるという先行研究の指摘とは異なる実践である。2 人は私的な自己の開示を通じて、ファン同士の親密性を高めようとしている可能性がある。したがって、推し垢は、応援対象に対する愛を示す場所であると同時に、ファン同士の繋がりを構築する場所でもあると認識されている (RQ1)。推し垢でアカウントの目的とは異なる日常や他の応援対象に関する投稿を行う時には、受け手への配慮が行われている様子が観察された。A は、異なる応援対象に関する投稿を同一アカウントであることをフォロワーに報告し、D は、愚痴を言う時の語り方を受け手に呈示している。これらの A 及び D のアカウント使用の語りには、「応援対象ごとに 1 つのアカウントを割り当てるべきである」、「ファン活動において自身の暗い側面を提示するべきではない」というアカウント使用に関する規範意識が現れている (RQ2)。これらの規範意識は、関係のない情報を相手に伝えてはいけないという量の格率や相手の面目を侵害してはいけないというコミュニケーションの規範との関連がある。A と D はいずれも、推し垢での発信の時にこれらの規範を意識し、自分がその規範を逸脱する発信を行う時には、フォロワーとの交渉を行っている。その交渉の時には、距離感の近さや愚痴等のネガティブな発信によってフォロワーの面目が侵害されないように配慮している様子が観察された。このことから、「コミュニケーションの規範を逸脱したアカウント使用を行う時には受け手に配慮しなければならない」という規範の存在が示唆された (RQ3)。

7. 結論・今後の課題

本稿では、X 上で趣味用のアカウントの 1 つである「推し垢」を中心にアカウントを使い分ける SNS ユーザーの語りを分析した。対象ファンコミュニティのファンはアカウントの使用目的に応じた自己呈示を意識しており、目的とは異なる投稿を行う時には、受け手にアカウントの目的やコミュニケーション規範逸脱に対する理解の要請や受け手の不快感に対する配慮を行っていることが明らかになった。本稿は、対象ファンコミュニティのファンの投稿の事例検討の一部にとどまっている。今後の研究では、研究協力者の投稿の傾向の分析、アカウント使用に関する語りの分析を蓄積する。それと同時に、対象ファンコミュニティにおける対面での参与観察時の語りにも着目し、対象ファンコミュニティにおけるアカウント使用の背景にあるコミュニケーション

ョン規範を包括的に捉えることを目指す。

参考文献

- 青山征彦(2018).「大学生における SNS 利用の実態——使い分けを中心に」『成城大学社会イノベーション研究』13(1). 1-17.
- 井上史雄・田邊和子(2022).『社会言語学の枠組み』東京：くろしお出版
- 宇宿公紀・加藤尚吾・加藤由樹・千田国広(2019).「LINE のグループトークでスルーをしやすいグループの特徴に関する基礎調査」『日本科学教育学会年会論文集』43 号. 652-653.
- 大野貴司(2007).「ファン・コミュニティ：性格と機能」『体育・スポーツ経営学研究』21(1). 47-55.
- 木村忠正(2018).『ハイブリッド・エスノグラフィー NC 研究の質的方法と実践』東京：新曜社.
- 「現代用語の基礎知識」編集部 (2021).『現代用語の基礎知識 2021 年版 ことばでつながる』東京：自由国民社.
- 末岡真里奈(2019). 繋がりオンラインエスノグラフィー：吹奏楽部員の Twitter 利用に着目して.
- 西村綾夏(2020).「絵文字を用いた隠語の生成過程と変換プロセス —Twitter『情報垢』の投稿を例に」『日本語用論学会第 22 回大会論文集』第 15 号. 113-120.
- 長谷川典子. (2004).「インターネット掲示板のエスノグラフィー：日韓異文化コミュニケーション研究に向けて」『多文化関係学』1. 15-29.
- 藤田華奈・坂井田瑠衣(2024).「Twitter における印象管理の分析：アカウントを使い分ける絵描きを対象として」『第 100 回言語・音声理解と対話処理研究会資料』.74-78.
- 水沼友宏・菅原真紀・池内淳(2013).「大学生の Twitter における行動規範に関する分析」『情報社会学会誌』8(1). 23-37.
- 若狭優(2018).「自己呈示の手法としての『SNS の使い分け』：状況論的自己論の視点から」『社会学雑誌』34. 113-130.
- Ahearn, L. M. (2021). Living language: An introduction to linguistic anthropology (3rd ed.). Oxford: Wiley-Blackwell.
- Grice, H. P. (2014). Logic and Conversation: Adam, J and Nikolas, C. The Discourse Reader (3rd ed). 62-72.
- Herring, S. C. (2007). Faceted Classification Scheme for Computer-Mediated Discourse. Language@Internet, 4, article 1.
- Ross, S. (2019). Being Real on Fake Instagram: Likes, Images, and Media Ideologies of Value. Journal of Linguistic Anthropology 29 (3): 359-374.

¹ 記載内容は研究協力者の自己申告である。

² 使用しているアカウントの名称は原則研究協力者が定義している名称を記載している。A のジャニーズ垢は、アカウント名称が固有名詞を含むため、筆者が変更したものである。D の「推し垢」は D がアカウント名に言及していなかったため、筆者が便宜的に名付けたものである。

³ ジャニーズ事務所は現在、「STARTO ENTERTAINMENT」と呼ばれているが、本稿ではより読者に身近な名称である「ジャニーズ」を使用する。

執筆者紹介（掲載順）

榎本剛士（ENOMOTO, Takeshi）	人文学研究科言語文化学専攻	コミュニケーション論講座
周 氷竹（ZHOU, Bingzhu）	人文学研究科言語文化学専攻	修了
稲葉 皐（INABA, Satsuki）	人文学研究科言語文化学専攻	博士後期課程
山口篤美（YAMAGUCHI, Atsumi）	人文学研究科言語文化学専攻	博士後期課程
山本由実（YAMAMOTO, Yumi）	人文学研究科言語文化学専攻	博士後期課程
岸田月穂（KISHIDA, Tsukiho）	人文学研究科言語文化学専攻	博士後期課程

（2025 年 4 月現在）

言語文化共同研究プロジェクト 2024

ことばと社会④

2025 年 5 月 31 日 発行

編集発行者
大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻